

東京大学大学院総合文化研究科 グローバル地域研究機構中東地域研究センター  
[スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座]



# UTCMEs ニュースレター

## VOL.17 2020

- |                                   |   |
|-----------------------------------|---|
| 1. カブース国王の思い出 . . . . . 1<br>森元誠二 | 3. 特集：三木亘の世界 . . . . . 5<br>(1) たくい稀れな「声のひと」 . . . . . 5<br>——歴史家・三木亘のセンス (新井高子)<br>(2) 三木亘先生著作目録 (杉田英明) . . . . . 11 |
| 2. パフワーン文庫から . . . . . 4          |   |

### 1. カブース国王の思い出

森元 誠二

去る1月10日、オマーンのカブース国王が亡くなったとの報に接し、同国の現代史に一つの大きな区切りがついたとの感慨を強く持った。享年79歳、今年には統治50周年の盛大な記念行事が予定されていただけに誠に残念であった。



故カブース国王

#### 1. ブーサイド王朝第14代「スルタン」が築き上げた近代国家の礎

オマーンの現ブーサイド王朝は18世紀半ばに源を発し、アラブ世界では最古の現存王朝の一つと言って良く、カブース国王は第14代の「スルタン」に当たる。今日の世界を見渡してみてもこの称号を保持する統治者は少ない。オマーン近代史を顧みれば、この王朝も押し寄せる植民地主義の大波からは逃れ得ず、これを嫌った父ブーサイド国王(1910-1972)が鎖国政策を取り続ける中で国民は疲弊していた。1963年にはアフリカの自国領ザンジバルも失って沈滞したムードがオマーン全土を覆う中で、英国サンドハースト陸軍士官学校から帰国したカブース王子(当時)自身も父によって南部のサラララの宮殿に閉塞されてしまう。

若き王子にとっての転機は、宗主国英国の力を借りて宮廷内革命を成し遂げ、父に代わって王位についた1970年の夏に訪れる。新国王は、折から60年代に始まっ

た石油生産が生み出す富を活用し、後に国民から「祝福されたルネッサンス」と称される繁栄をもたらす親政に乗り出すのである。当時、国民一人当たりの国民所得は400ドル余り、国内には学校がわずか3校、小規模な病院が1つしか存在しないというゼロからの国造りであった。若きカブース国王は、そこから英国を手本に官僚機構を整備し、諮問議会と国民議会の二院からなる議会を設置し、国家基本法を制定して近代国家としての礎を築いたのである。

私は2008年6月から3年余オマーンに日本国大使として駐在したが、伝統的な建物を維持しつつも近代的なビルが立ち並ぶ市街地や大型ショッピングモールの活気に象徴される著しい経済発展を目の当たりにして正直驚いた。空港からマスカット中心部に向かう高速道路沿いにはナツメヤシやブーゲンビリアが植えられ、山肌の茶色と芝生の緑がコントラストをなして自然豊かな印象すら受ける。途中、右手に現れるグランドモスクの陰影がカブース国王の統治を象徴するかのよう

## 2. 啓蒙君主の発するオーラ

在任中私は4度にわたって、カブース国王に拝謁する機会を得た。最初の信任状捧呈式での会話は手短なものであったが、そこでも国王の我が皇室に対する敬愛の念は具に感じられた。残り3回は最後の離任に際しての拝謁を含めて全て国王とのテタテの会談であり、それぞれ1時間以上に亘って幅広いテーマにつき国王が語る興味深い話を聞くことが出来た。話しているいつも感じることは、内政、外交を含む国王の物事への深い洞察力であり、言葉の端々から漂ってくる啓蒙君主としてのオーラであった。こちらからの質問を受けて、興に乗ってくると次々積極的に話しかけてくる感じである。周囲がドアを開けて時間を制することは決してなく、その場を辞するにはこちらからタイミングを見つけて暇乞いをせねばならなかった。

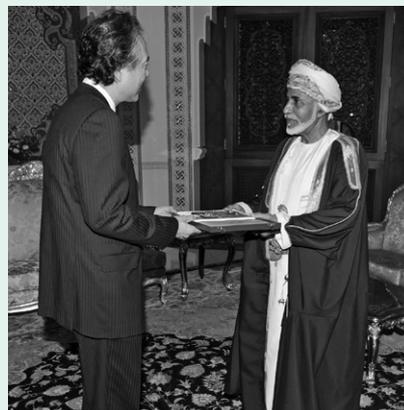


ニスフ近郊のシュムーク宮殿における会談の一コマ

とにかくカブース国王の実体験に基づくエピソードだけに、イランのパーレビ国王やエジプトのサダト大統領などの歴史上の人物とカブース国王が織りなす歴史のひとこまの逸話は史実としても面白い。今日イランとアラブ首長国連邦との間で領土問題となっているペルシャ湾に浮かぶ三島を巡る帰属についてのパーレビ国王自身の認識、ムバラク大統領やカダフィ大佐の人物像や彼らの権力崩壊の原因、革命後のイランの統治体制と国内の矛盾や革命防衛隊と正規軍の評価など齒に衣着せぬ批評は聞いていて小気味よいぐらい

であり、長文にはなったが本省に逐一報告した。後述の「アラブの春」に際してのカブース国王の迅速で的確な対応は、恐らくムバラクやカダフィの失脚から得られた教訓に学んだものであろう。

カブース国王のバランス感覚に基づく国内の統治や近隣諸国との外交にも定評があった。オマーンの宗教は、同じイスラムではあってもスンニ派でもシーア派でもないイバード派と言われる少数宗派であるが、リーダーを合議制で選ぶ民主主義的色彩が強く、スンニ・シーア両派ともうまく折り合っている。外交面でもバランス感覚が存分に発揮され、国王は常に独自の外交を展開した。即ち、湾岸協力理事会(GCC)の一員として政策調整には参加しつつもイランとも良好な関係を保ち、イランやカタルと断交を図ろうとする一部湾岸諸国の試みにも決して同調することはなかった。イランでしばしば拘束された米国人の釈放に裏で動いたのは実はオマーンであったことが多く、彼らの釈放後には米国政府から謝意が評されることもあった。オマーンはアフガニスタンからも地理的に近く、米国のチェイニー副大統領や英国のブラウン首相が首都マスカットを日帰りでカブールとの間を往復する際の拠点としていたことはあまり知られていない。



離任に当たり、マスカット近郊のバルカ宮殿にて国王から勲一等ヌーマン勲章を親授された

## 3. 歴史上珍しくスムーズに行われた王位の継承

機微な問題ではあるが、私から王位継承問題についてもカブース国王に質してみたことがある。歴史的にオマーンでは王位継承の度に内政が不安定化することが多かったからである。国王は自信をもって、この問題は国家基本法に定められており、既に王位継承は制度化されているので心配はしていないと淡々と述べていた。統治王族の間で合意がまとまればそれで良く、3日以内に合意が出来なければ自分の遺言が開封されて後継者が指名されようが、これはあくまでも自分の推挙であり、最終的にはこの人物が伝統に従って王族間の合議で自分の後継者として認められる必要があると強調していた。興味深いことに、カブース国王自身も父親を王位から追い出したものの、新たに国王の座に就くには統治王族の承認を待つ必要があったとのエピソードを持ち出していた。今回、カブース国王が自ら望んでいたように、後継者を巡って何らいさかいが生じることなくハイサム新国王にスムーズな王位の継承が行われたことには、天上できっと安堵しているに違いない。

## 4. 「アラブの春」の迅速な克服

私の在任中、一度だけカブース国王の統治を心配したことがあった。それは、2011年にアラブ世界で吹き荒れた「アラブの春」の混乱がオマーンにも数日及んだ時である。国内で経済状況の改善、腐敗官僚の糾弾を求める声が公然化し、抗議運動が高まる中で遂に二名の死者が出た。この間、一部に王制廃止を唱える声が出るなど情勢は困難の度合いを深めた。これに伴い、日本もオマーンへの渡航に関する危険情報を一段階引き上げた。危機に対応する国王の反応は素早く、王宮大臣、警察庁長官の解任を含む閣僚16名の入替えに象徴される政治改革、最低賃金の引上げや年金・退職金の積み増しといった労働者の雇用条件を改善する経済政策など一連の施

策に矢継ぎ早に取り組んで情勢を短期間に鎮静化させることに成功した。このことは、日本がオマーンに対する危険情報を他のアラブ諸国に先駆けて元に戻すことにも繋がった。

## 5. ブーサイド王朝と日本との緊密な結びつき

ブーサイド王朝と日本の繋がりには浅からざるものがある。古くは明治政府がペルシャとの交易のために派遣した軍艦「比叡」がマスカットに立ち寄りたりしているが、大正に入ると探検家で教育者でもある志賀重昂がカブース国王の祖父に当たるタイムール国王を宮殿に訪ねている。この出会いが後に退位したタイムール国王が日本を訪問し、日本人女性を妻に迎えて二人の間にプサイナ王女が誕生するという劇的な展開に繋がるのである。カブース国王は、叔母に当たるプサイナ王女と日頃接する中で日本の文化や精神について学んだそうである。

実は、本人の口から出るまで知らなかったが、カブース国王は王子として英国への留学の後に父サイド国王の勧めで世界旅行に出かけた途次、1963年に日本に立ち寄っている。その時の印象について、「日本は欧州とは完全に異なり、また、(自分が途中で訪れた)東南アジアの国々とも異なると感じた。日本文化には単純化された中にも美しさがあり、それは芸術的ですからあると感じた」と表現していた。

天皇皇后両陛下が皇太子同妃両殿下として1994年に中東を公式訪問された際、オマーンで接遇に当たったのもカブース国王自身である。国王は伝統に則って砂漠のロイヤル・テントでゲストをもてなしたが、国王からは更にアラブとしては最高の友情と尊敬の証である駿馬「アハジージュ(歓喜の歌の意味)」が贈られた。その血統は宮内庁御料牧場において子孫に受け継がれている。

## 6. 東京大学に創設された「カブース国王講座」

私にとってオマーン在勤時の至高の喜びもカブース国王によってもたらされた。国王の寛大な寄付により、2010年10月東京大学大学院総合文化研究科に中東地域研究センターに所属する形の寄付講座として「カブース国王講座」が設立されたのである。この講座は基金の原資から生じる利息で運営される永久講座であり、特任の准教授と助教を擁している。東京大学の他にも、カブース国王講座はケンブリッジ大学、ライデン大学、メルボルン大学、ウィリアム・アンド・メアリー大学など世界の名だたる大学に設置されているが、2014年10月にはこれら講座の代表が一堂に会する総会が東京大学で開催された。その開会式には時の皇太子殿下がハイサム殿下(遺産文化大臣)と共にご出席されたが、今ではそれぞれ国家元首の地位に就かれているのも感慨深い。

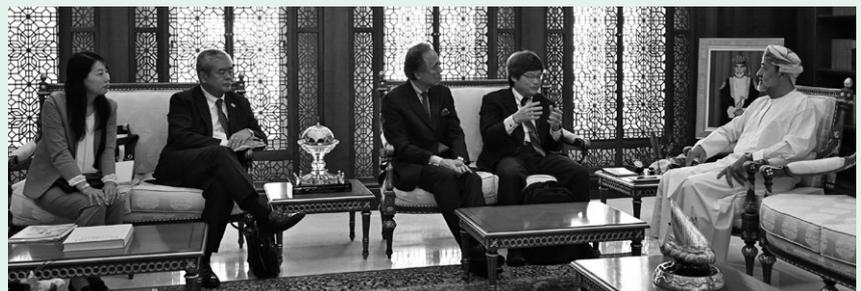
## 7. カブース国王の遺志を継ぐハイサム新国王と日本の関係

「カブース国王講座」には、オマーン日本協会会長を務めるオマーンの実業家モハメッド・バフワーン氏によって寄贈されたアラブ学のための図書館も付属している。この「バフワーン文庫」では、イバード派関連の書籍を始めとして日本ではここにしかない図書の充実にも努めて来ており、部外の来訪者も多い。

本年2月に入って、ここにハイサム新国王から寄贈されたオマーンの遺産文化に関する80冊余りの図書が届いた。昨年9月に天野浩名古屋大学教授と共にオマーンを訪問して遺産文化大臣としての殿下に会った際に話題となったことを新国王になってからもきちんとフォローアップしてくれた成果である。これで文庫に唯一の貴重な蔵書がまたいくつか増えた。

我が国皇室とも緊密な関係を有し、親日家として知られるハイサム国王だが、同国王が王位継承後最初に行った施政方針演説でも高らかに宣明したようにカブース国王の志は次の治世にも引き継がれる。新国王は、日本との関係でも先代の築いた礎を一層強固にしていってくれるものと確信している。

(本稿は、外務省霞関会会報8月号に掲載された寄稿を加筆修正し、関連する写真を加えたものである。)



天野教授と共に遺産文化大臣(当時)であったハイサム殿下と遺産文化省において会談

## 2. バフワーン文庫から

### ハイサム国王陛下からの図書寄贈

2020年2月、バフワーン文庫は、オマーンのハイサム国王陛下から、図書の寄贈を頂戴しました。本件は、2019年9月、当時遺産文化大臣であったハイサム国王陛下と森元誠二本学総合文化研究科客員教授との会談を受け、バフワーン文庫の寄附者モハメッド・バフワーン氏のご尽力により実現しました。

オマーンの歴史と思想に関する本寄贈図書は、同国の遺産文化省が出版しているものです。登録完了後、皆様にもご利用いただけるように配架する予定です。



立花眞・バフワーン事務所秘書室長（左）と森元誠二・客員教授

### 3. 特集：三木亘の世界

20世紀後半から日本の中東・イスラム史研究を牽引してきた三木亘先生が、2016年に鬼籍に入りました。三木先生の研究関心は、歴史生態学や世界史学など多岐にわたり、その業績は現在においても色褪せることはありません。また彼から薫陶を受けた研究者・学生は、何十何百人にもものぼります。本特集では、エッセイと業績目録から、三木先生が歩んだ世界を回顧します。

#### (1) たぐい稀れな「声のひと」

——歴史家・三木亘のセンス

新井 高子 (埼玉大学・詩人)

「俺は、日本でいちばん乾いた瀬戸内の生まれ。関東の夏はうとうしい」。この季節が来ると、口癖のように言っていた三木亘のことば。逝去から四年が経とうとしているが、そんなになるのかと思うと同時に、旅立ったあとも、けっきょくその声とつきあいつづけている気もする。

カンペキと言っていいほどに知恵のひと、知性のひと。だが、後半生は文字を重んじなかった。講義や講演、食事や飲み会で、聴衆や同僚、教え子らに「語る」のが彼の愛した表現法。いや、この世でもっともたしかなのは、聞き手の耳のなかに残る声だという信念でもあった。中東でのフィールドワーク、長年の教職などを通じて得た達観のひとつ。

ゆえに、2014年4月、東京大学中東地域研究センター主催シンポジウム「悪としての世界史 三木亘の中東地域文化論」で、記録のためにrippana撮影機が設置され、思えば、学者人生の最後のまとまった講話の機会であったにも拘わらず、後日、担当の学生がスイッチをうっかりしたと聞いたとき、その「三木亘らしさ」にわたしはむしろ感動した。

風の又三郎みたいなところが彼にはある。あまりにさりげないその佇まいは、記録しようと思ったときにはどこかへ去っていて、記憶のなかにしかいない。存在じ

たいが、声そのものと言っていいような。たしかに、低音のよく響く声の持ち主だった。それゆえ、この世からほんとうに旅立ってしまったとしても、じつは耳の穴ぐらではこっそり息づいている気もして。

そのシンポジウムで登壇者のひとりだったわたしが、三木亘の「センス」について発表したのは、中東研究、歴史研究では門外漢であるものの、三十年來の教え子であり、また詩というとりとめない世界に住まう住人として、それなら語り得るのではないかと思ったから。ともに過ごした時間をさらにあらためてふり返りながら、断章になるが、壮大なスケールを持つ学者の、深妙なそのセンスについて書き留めたい。



2014年4月20日、シンポジウムで講演する三木。上岡弘二撮影。

#### 1 歴史は批評

出会ったのは、わたしが慶応大学一年の1986年。ポストモダンの思潮が流行っていた頃でもあるが、三木にとって近代からの脱却は、すでにあたまでなく、からだに根差したものだ。慶応の同僚だった可児弘明は、「三木さんは、当世溢れんばかりいる歴史研究者の類いではない。稀有な歴史家だ」と評していたが、「あつたがままの歴史はない。実証主義は崩壊した」と言い放つ前衛性に、教え子たちは魅了されていた。

「自分がなかに生きている歴史、つまり現代の現実というものを、悪として観じつつも、しかもまさにそれがかれにとって悪であるが故に、とことんまで適確に、それを認識しつくさないでやまないのが、本当にすぐれた歴史家」（『悪としての世界史』46頁）と三木自身が記しているが、歴史叙述の対象を開くのは、悪なるものに対する問題意識。そのうえで、それを抱えた自己をも含んだ認識の叙述として歴史はあるべきもの、じつのところ、ほんとうの歴史とはそうではあり得ないもの。古代をとり上げようが異境を扱おうが、その叙述は、ある個人の問題意識から発される、一種の攻撃とさえ言ってもいい批評行為。歴史とは、つねに現代批評なのだとは彼は言う。

学生時代のわたしの講義ノートには、古文書などの文字史料だけでなく、フィールドワーク等による広大な非文字領域をも見渡しつつ、現実という史料から「ひとつの絵」を描くことが歴史だともある。情報

を並べて整理しただけの論文は、東京湾にでも捨てたほうが良いと放言してはばからなかった。

たしかに、その歴史叙述のことばは、まるで本質のかたまりのように深い。とてつもない行間で記された世界史が三木の文章にはある。「相手ばかりでなく、向きあっているおのれをもたえず客体化してやまない、ことばの本来の意味でのユーモアのゆたかな、強靱な精神のひと」(「上原専禄」493頁)。これは三木が上原を評したことばだが、ご当人にもそのまま当てはまるのではないだろうか。

## 2 ことばのたくらみ

わたしが詩作を営みに選んだこともあって、書くとはなにかを諭されることもままあった。「書くことは闘い。なにかを書く前に、これとどう遊ぶか、必ず考える」とも言っていた。彼にとっての「遊び」は後述するが、その歴史叙述の深みは、そのような研鑽の賜物でもあった。

「実際、読んでいてしらすしらす書物の中の世界へひきこまれてしまい、著者のほげしいうたえや息づかい、体臭がこちらにせまってくるような歴史叙述が、たしかに存在する。アンリ・ピレンヌの『モハンマッドとシャルルマーニュ』がそうだった。書いてある筆つきは冷静そのものの客観的叙述のスタイルである」(「歴史叙述と歴史意識」3頁)と三木はピレンヌを評し、「簡潔で、圧縮され、事実在即した筆致と、事柄の核心に入りこんで、筆太にさっと全体像を描きあげる洞察力と能力」(「歴史家ジャバルティ」426頁)とジャバルティを捉えるが、いかにすればそのような叙述がじぶんにできるか、問いつづけたからこそ、先人の筆致を吸収できたのである。

三木の「人間移動のカルチャー」(83-106頁)は、インド洋のダウ船貿易、都市的な中東社会へ想念を飛ばたかせつつ、ベイロートの空港やカイロへの機上で実際に出会った中東のひとの往来を描き上げていく展開と文体が鮮やか。読者に訴える

力を持つ歴史叙述の端的な例と言えよう。そこには恋物語もチャンバラもないのだが、知のダイナミズムが読者をその内側へ引きずり込む。

「去年の春、東京ーカイロ間を往復とも利用したパキスタン航空の便は、(中略)いわばインド洋世界のローカル線さながらであった。往きには、にぎやかな日本人団体客がマニラでおりると、バンコクまでレバノン人のすこしがめつい男と隣席、バンコクで大勢乗込んできたイラン人団体客はカラチでおりたが、老幼婦女も多い観光客の感じで、スクリーンの前で手品などの余興をやってみせるのがいたり(中略)。いまもむかしもインド洋を縦横に往来しているダウ船の航海も、このときのPIA機の航空と似たようなものではないだろうか? (中略) 寄航地それぞれの土地のくらしの匂いや抑揚をおのすからふりまく人たちが、いれかわりたちかわり乗降し、それぞれにどっさり荷物をかかえている」(「人間移動のカルチャー」97-98頁)

私小説的な純文学より普遍性のあるホードボイルドを高く評価するひとだった。慶応大の同僚で、しごとの理解者でもあった湯川武が先立ったとき、「とうとう



2014年4月12日、金沢文庫の三木巨頭にてシンポジウムの準備。左から2人目奥が三木、その手前、向かって左から近藤洋平、筆者、片桐小幸。杉田英明撮影。

天国へ行っちゃった」と電話口でわたしが半泣きになると、「地獄のマチガイだろ」と低い声で冷や水を浴びせた。ことばと向き合って生きる以上、感情やヒューマンズムにかんたんに吞まれてはいけないこと、切り立った叙述のためには、まず筆者自身がドライな感性を磨く必要があることを、身をもって示そうとしてくれたといまでは思う。

## 3 パラダイムチェンジへの欲望

十九世紀ヨーロッパが作った世界史像、そしてそれを無批判に受け入れた近代日本。

「世界史のなかのイスラム世界」(217-275頁)や『世界史の第二ラウンドは可能か』(平凡社、1998年)などの著作によって、旧来のその歪みを批判しながら、中東・北アフリカをも含めた地中海世界をひとつの場、すなわち「西洋」と捉えなおすことで、強烈な新しい世界史像を構築したことが、三木巨のもっとも大きなしごとのひとつであるのは言うまでもない。

「私は、(中略)地理的にいって西アジア・北アフリカ・ヨーロッパを一括して「西洋」と名づけ、これを単一の文明展開の場とみることを提案した。(中略)その第一は、この「西洋」の場に展開した諸宗教が、けっきょくは旧約的一神教として一括できるという事実である。(中略)さまざまの文明が歴史的に重層化したこの「西洋」の中心部、西アジアや東地中海周辺では、いつの時代もキリスト教徒・ユダヤ教徒がイスラム教徒といりまじって共存してきているのが、本質的なこの場の特徴なのである」(「世界史のなかのイスラム世界」224-225頁)。

さらに、近代ヨーロッパに対しては、「近代西欧文明は根本的に軍事文明であって、経済も軍事的思考で展開してきた。(中略)戦略的にしかものを考えることをしないみにくい姿を全世界にさらしている。この軍事文明としての性格は民族や近代国家というパラダイムとからみあって展開してきた」(「中東における民族の間

題」314頁)と記す。このような自前の問題意識によって、西欧、そしてその後継者としての米国を批判的に捉え、エドワード・サイードによるオリエンタリズムの問いかえしが注目される前から、「西洋」なるものの脱構築に果敢に挑んでいた三木だった。

また、都市民、農耕民、遊牧民、海の民など、宮本常一らから影響を受けた暮らしによる民衆の分類を、歴史にも活かした社会的センスも光る。

アジア・アフリカの解放運動に傾倒した青年期がその批評精神の基盤になっているのは言うまでもないが、後半生に親しいつきあいをした者の立場から見れば、彼は根っから、そのようなパラダイムチェンジが好きなのだ。みずからの思考をフル回転させ、大胆不敵なことを考えるのに、無上の喜びを感じられるひと。幼いころ、夢中でいじった積み木遊びを世界史に喩えることもあったが、たしかに、思いがけない組み合わせが見つければ、おのずとパラダイムはひっくり返せる。

くわえて、「人類滅亡観光協会のこと」(『月刊百科』432号、平凡社、1998年)などに鮮やかに表れているように、世間の、そして周囲のパラダイム転換を、知的かつ愉快に煽りたくてたまらない、ふしぎなアジテーター的センスもある。

教え子たちがだした年賀状の返事の定番は、ひとこと、「乱世ばんざい!」。それも二月にやってくる。

#### 4 理系的センスの歴史生態学

一高を卒業後、東京大学文学部史学科に入りなおすまでの一年間、北海道大学理学部で植物学を専攻した三木がよく口にしたのは、「俺はそもそも理科なんだ」。

「半日もクモが巣を作る様子を眺めて、「数式にしたらどうなるんや」と飽きずに考えられるこどもだった」と語ったこともあったが、群衆あるいは群れとして人間を捉え、その動態を抽象化することで導き出されたフロンティア理論や文明移転論に

は、その巣を見つめつづけたセンスと通底するものがあるのではないだろうか。

また、学問とは要するに好きなことをやればよく、結果として属するものがなければじぶんで名付ければいいつねづね語っていたことの実践として、三木は「歴史生態学」というジャンルを打ち立てた。それは、それぞれの土地の植生や植物をベースに据えた歴史文明論である。「近代経済学、マルクス経済学は全部間違っています。それらはものを生産することを基礎として作られています、生態学的観点に立てば、地球上で物を生産しているのは植物だけです」(「イスラム世界を理解するために」348頁)とあるように、植生の豊かさや貧しさ、植物の移動から、大局的に歴史の動きを捉える。

「このアラブ帝国の繁栄は生態学に関連があります。東南アジアからインドにかけては世界の植物の宝庫です。(中略)それでアラブの大帝国が出来た時は、僅か一〜二世紀の間に、東南アジアのさまざまな有用植物がインドで文明となって、栽培植物として大商業社会のイスラム社会へどんどん入っていく」(「同」354頁)と記し、アラブ帝国の興隆を植物の商業的な移動から捉えなおしたが、前述した西欧文明の凶暴な軍事性も、アルプス・ピレネー山脈以北のヨーロッパの植生が、悲惨なほど貧しいことがその根本にあると説く。「生態学的にも世界で一番貧しい地域です。昔、氷河をかぶって動植物がみな死んでしまった。氷河が退却したあとも、アルプス、ピレネーがありますから、植物なども北へ帰っていけないものが圧倒的です。現在、アルプス・ピレネー以北の植物の種は全部併せて、せいぜい一万二〜三千種です。五百種類くらいわかれば、ヨーロッパの植物は大抵わかったようなものです。ですから食生活は今も大へん貧しいです」(「同」346頁)。

それは、いわば、マックス・ウェーバーがプロテスタンティズムの観点から解き明かした近代ヨーロッパなるものの精神

の出所を、植物生態学の立場から、新たに批判的に問いかえそうとしたとも言えるだろう。

つまり、近代文明とは貧しい生態系から生まれた知識や技術やシステムであるがゆえに、そのせちがらい発想に立つと、地球ほんらいの植生の豊かさが活かさないというのである。豊饒な土地も貧しく歪められてしまう、と。「わたしたちはのんびり寝ていて、目が覚めたらそこら辺の実をとって食べて、暑くなったらサルンのまま水に入っていけば、何もなくていいんだよ」という東南アジアの女性作家のことばを引きながら、戦争や経済戦争も含め、むやみに人間を忙しくさせてしまった近代文明を、三木はしばしば揶揄した。

人間を含めた動物はすべて植物によって生かされているとも語っていたが、地球の温暖化、コロナ禍など、さまざまな環境問題が起こる今日、彼の歴史生態学の視座には、問題の本質をえぐる力があるのではないか。

自宅の庭の植物を丹精することを日課とした晩年だった。訪ねれば、たいてい庭にいて、手拭いで汗をふきながら、その折々に咲く花を見せてくれた。土をいじりながら、彼の思索は植生と歴史を結び付ける飛翔をしていたに違いない。鳥の目のような生態学の眼差しで、世界を驚つかもうとする。

#### 5 つきあいがかんじん

三木はしばしば、イスラム世界がじぶんに「つきあい」を教えてくれたと語っていた。ドライな感性を尊ぶわりにはさびしがり屋の一面もある先生だったが、教え子と何十年もつきあいつづけたのも、香料薬種商をはじめとするイスラム商人から学んだことの実践のひとつ。

「人間関係としての都市、という私の視点から言って、このメッカという都市は、ヒジャーズ南部の涸川(ワーディ)のひとつに位置する、人口一万ばかりの集落だけではなく、部族という父系血縁、結婚とい

う女縁、商業という職縁、農地や家畜の所有による労働者との縁、到来したよそのとの縁など、かずかずの縁によってひろい地域とつながった、人間関係のネットワークの総体を意味する]（「人びとの出会い、それが都市であった」337頁）と書き、中東社会の都市性を強調するとともに、そのつきあいのネットワークをじぶんの暮らしでも重んじた。

「ぼくは、いつも世界史の授業の最初の時間に、「世界史というのは世界とのつきあい方に関する学問なんだ」と（い）うことを、生徒に宣言することにしています」（『具体的・能動的・民衆の歴史学』25頁）とあるように、彼の世界史観、また対象である個人を屹立させるその叙述もまた、つきあい、すなわち人間どうしの具体的な関係性を礎としていた。理系的センスが地球を俯瞰する鳥の目を彼にもたらしたとするならば、そのつきあいのセンスは、虫の目のように、宮本常一、上原専禄、田中惣五郎、松谷みよ子らの人間像を、その温もりまでをも含めて描いた。

じっさい、呑んでおしゃべりするときの上なく楽しそうで、またどんなにアルコールが入ろうと、雑談から知的な種子を拾い上げ、そのレベルに繋げるのを怠らなかった。

けれども、そもそもは内向的な少年だったそうだ。三木は、播州一円に草履を商う仲卸し問屋の息子として、1925年、兵庫県姫路市で生を受けた。「日本国が戦争に負け、姫路の草履問屋のしごとを手伝うようになり、大阪などに買い付けに行かされる。最初はいやいやだったが、商売を通して、引っ込みじあんだっただじぶんがにわかになんて変わった」と語った。姫路生まれの商人の素養が、やがて彼をイスラム都市にひき付けた面もあっただろう。

## 6 性弱説のイスラム教

特筆すべきことのひとつに、そのイスラム教理解の深さがあるのを忘れてはならない。ヨーロッパのキリスト教のような言

語規範ではなく、それは行動規範の体系なのだ」とついに説いていたが、イスラム教徒でないにも拘わらず、その感性をみずからからだで受けとめた上で、日本語でみごとに本質を言い当てることのできた三木は、稀有なひと。

イスラム世界のいわゆるIBM、インシャッラー、ボクラ、マーレーシュは、一瞬一瞬が切断された原子論的時間が背景にあるという説はことに鋭い。つまり、西欧近代的な進歩発展、日本の伝統社会などにあった円環とは異なる時間論が、そこにあるというのである。

「一瞬一瞬はすべて神の創造にかかるという考え方です。ですから、この一瞬と次の一瞬はつながらないので、従って因果律は成立しません。（中略）神様は人間を弱い存在として造られたという考え方が、非常に奥深くにありますね。（中略）人間を超えた何らかの力、その前に人間の営為なんていうものは、小さなものでしかない」（『イスラム世界の歴史生態学』130-131頁）、「基本的には、これまででもっとも抽象度の高い一神教で、より高度な都市化にふさわしい意識形態という、イスラム教自体の性格が、広大な地域の人びとを引きつけてきた」（「人びとの出会い、それが都市であった」340頁）と書くように、アッラーの超越的な力から因果律を拒む原子論的時間を導き、ひとは小さな存在でしかないという人間観をも示唆するのだった。

学生時代のわたしのノートには、「イスラム世界の考え方は、じぶんの力を客観視している。無責任な逃げ口上じゃない。次の時間を人間が決められるなんて、神に対する不遜。神さまは、ひとを弱い生き物として作られた。弱さ、小ささをも受け入れ、ありのままのじぶんを見つめようとする。この根底にあるものを一言で言えば、「こんなたしにだれがした！」。

ある講演会では、イスラム教は、性善説でも性悪説でもなく、性弱説だと語っていた。ふり返れば、恋愛やら就職やらで右往左往していた二十代の教え子たちに、この

ようなことばは、イスラム教という枠を越え、励ます力を持っていた。きょう男にフられても、そんなじぶんはあしたにつながっていないなんて、めっぽうステキじゃないか。

中東の人びとが醸す、状況に居直ったような独特の太さ、三木のことばを借りながら「おどかなその姿」が、じつは弱さの自覚から導かれていることにハッともしもする。植物によって生かされているという前述の論とも重なりつつ、人間の弱さへの着眼は三木の肝要なセンスだと思う。

なお、このような彼のイスラム理解は、すぐれた翻訳力の成果と言ってもいいだろう。「日本語への文字づらだけの翻訳ではなく、そのことばと日本語との、一定のずれをもって、それぞれの背後に存在する、それぞれの歴史社会そのものの翻訳を志向する」（「つきあいがかんじん」143頁）と彼自身が書いているが、からだで受けとめたイスラム教理解を、さらに時間をかけてその身に沈め、あるときおのずと日本語でつかみなおしたに違いない。

マーレーシュは、標準語の「気にしないで」「仕方がない」ではなく、大阪弁の「しゃない」がもっとも近い訳語だとも言っていた。バスのなかでとなりのひとの足を踏んでしまったとき、「マーレーシュ」と声をかけるのは、踏まれたほうではなく、踏んだほうなのだから、「しゃない」がぴったりなのだ、と。

## 7 音楽としてのことば

神の前ではすべての人間は平等というイスラム教の考え方は、中東の都市で、大衆音楽と芸術音楽に境い目がないことにも通じていると彼はいう。ファイルーズやウンム・クルスームのうたを愛したが、ユーミン、中森明菜から、小比類巻かほるやPUFFYまで、日本のポップスも聞きまくっていた。

だが、うたや音楽は、彼の思想ではその枠内にとどまらず、「非文字文化」と自身が命名した、声やからだや記憶の領域の核心

でもあった。冒頭のシンポジウムでも「うたは存在のひみつ」と説きつつ、ファイルーズがうたった「わたしに蘆笛をください」をアラビア語でみずから口ずさんだ。

長年使わなかった外国語が、その土地へ行き、ことばの音楽に包まれると、しぜんと湧いてくるのは、三木だけでなく、だれもが体験することだろうが、そのような経験を見つめて、「生きてかわされていることばはそれ自体ひとつの音楽である」(「つきあいがかんじん」145頁)と昇華した。

三木が丹念にすすめた仕事のひとつに、中東の香料薬種商から生薬の種類や効能を聴きとった英文モノグラフがある。そこで彼は、師とも仰いだカイロの薬種商、スルール・アブデルハーディについて、「もうこの商売を四十年もやっている、一人前になるには十年はかかった、というスルールは、そのことばをうらぎらなかつた。生薬のひとつひとつについて、その処方について、何を訊いても、耳ざわりのよいうたのような抑揚のカイロ弁で、よどみなくかれは答えた」(「等身大ということ」116頁、傍点は新井による)と記す。家伝の処方方は、ひとつの「うた」として、薬種商のからだのなかに仕舞われていた、と。

表記によって整理されたあたまたの領域にある文字文化と、不安定な声によるからだの領域にある非文字文化を対比させる三木。そして、後者こそが宝庫であるとしたうえで、うたや音楽は、そこに眠る膨大な宝を引きだす鍵として捉えられたのである。

が、稀れに、文字のなかに声が宿るテキストもあるらしい。「それ(新井註、宮本常一「土佐源氏」)を開いてみると、もう二十年ちかくものむかしに読んだときの強烈な印象がもどってきた(中略)。それは、あたまたではなく、からだの記憶の領域に貯蔵されて、(中略)からだの底からひきずりだされてきたのだろう。いまその本のページを開いてみておどろいたのだが、たとえ文字化されていても、それは本質的に語りであった」(「宮本常一さんのこと」473頁)。



2014年4月20日、シンポジウムで歌を披露する三木、左隣は筆者、右隣は杉田英明。吉田秀美撮影。

三木の書きものにも、そのまま言えるとわたしは思う。

## 8 姫路の町ッ子

「東京は日本全国の田舎者が集まったお役人の町で、標準語はそもそも役人ことば。漢音ばかりで気色わるい」などというのも、その耳のよさが表れたひとことだろう。生まれ育った姫路など、関西弁には、重箱読みや湯桶読み、つまり和音と呉音・漢音が交じりあった、熟れたことばが多いと言い、なかでも三木の思想の核ともなったのが「自前」。

前述した「西洋」の脱構築、歴史生態学、また、未開、文明、野蛮とすすむ時間序列論なども含め、近代ヨーロッパが作った像を越える彼のそれは、「自前」の世界史。口にしてみると、類義語の独自や自製よりも、すっとからだに馴染むからふしぎだ。ひととひと、くにとくにが対等なつきあいをするために、互いに自前のものをもち寄ることが肝要だとし、現代日本の政治家に対しては、みずからすすんで米国の属国となっていると辛辣だった。

三木にとって、平等とは、富や地位が均等にならされてあることではなく、つきあいを対等にすること。王さまと乞食でも、それぞれが自前の考えをもって向き合えば、対等と言える面があって、イスラム世界の神の前の平等には、そのような意識が潜んでいる、とも。

「俺は、しょせん、遊び人」も口癖だった。90歳まで長らえた人生だったのに、

蔵書の整理はおろか、著作目録ひとつ作らず、教え子や草木と戯れつづけた。仙人のような飄々とした風体がそこにあったとはいえ、ともに遊び惚けたひとりとして、目録作成の労をひき受けた杉田英明、東京大学中東地域研究センターに、この場を借りて深謝したい。

「遊び」も、三木の思想だったのだ。学問は上等な遊びとも言っていた。つまり、彼にとっては、前述の現代批評もパラダイム転換も、好きだったカラオケと同じように、ひとがひととしておおらかに存在することの循環のなかにあった。ときに、対象とのぎりぎりのせめぎ合いをも含んだ深妙な闘いとしてさえ、遊びはあったのだ。

ほとんど三つ児のたましい、姫路の町ッ子のセンスとして、生まれてこのかた「遊び人」は携えられてきたようだ。播州の商都であると同時に、日本帝国陸軍第十師団と歩兵第三八連隊の司令部が置かれた軍都でもあった当時の姫路。地付きの商人の息子だった三木は、軍人やその師弟との軋みを感じながら育った。それがひりひり感じられるほど、繊細で勤の鋭い少年でもあった。

軍事教練の教官とのあいだで起きた軋轢を書きたい、湯川の編集下で教え子たちがデータ入力した米寿記念版『三木亘著作選：悪としての世界史——中東をめぐる』にその文章を載せたいと、繰りかえし口にしていたが、遅筆の三木がしたためたのは、その出版記念シンポジウムさえ終わったあとのこと。

2014年8月、熱中症を患った彼を見舞うと、鉛筆書きの小文が病院のささやかなテーブルにあった。幻覚症状を伴う重症での緊急入院。衰弱のはてで、まるで迷子札のように綴られたその文章は、まさしく三木亘の根っこだと思った。

吉本隆明をはじめとする同世代の文化人のほとんどが軍国少年だった時代に、日本軍を「悪」と捉えることがなぜ幼い三木にできたのか、そのセンスのよさはどこから来るのか、わたしはじかに尋ねたことが

ある。その答えは、「俺は貧弱なからだで、銃やサーベルがまったく似合わなかったから。小柄な俺には重すぎる」。

軽妙なようで、含蓄深い。やはり、三木は根っから「からだのひと」。じぶんのからだの快不快から、ものごとをたしかに嗅げられるひと。のちのち、イスラム教に嗅ぎとって、歴史生態学の礎となる人間の弱さ、出発点はここかもしれない。

姫路の町ッ子がその身を賭して挑んだ「遊び」の自画像。批評の原点、問題意識のはじまりと言ってもいいだろう。おそらく絶筆ではないか。引用して、拙い断章を閉じたい。

---

生まれは姫路市米田町一四番地、米田町の草履屋、みき屋。生年は一九二五年（大正一四年）一〇月一四日。父、三木円治、母、ますゑの子。六人兄弟（男は四人、女は二人）の次男。

船場小学校から姫路中学へ。入学一番、一組級長。四修で姫路中学を四年で卒業。

勉強はしたことないのに、ずっと一番で級長。みんなの前に立たされて、「敬礼」「<sup>まき</sup>捧げ一銃」と号令をかけた。みんなとはなれて前で重たいサーベルを上げて、号令かけて、聯隊長なんかの前をエッペイ行進。隊列そろえて、前進。聯隊長の前を行くときは、抜身のサーベルを眼の上にとかだかとかかけて、「捧げ一銃」と号令をかけて、サーベルを真っ直ぐに額の上に立て、ななめ右下へふり下げた。

鉄砲は日露戦争のときに使った三八（サンパチ）式歩兵銃で、サーベルもそのころのもの。全部武骨で重い。それを捧げたり、「捧げ一銃！」と号令をかけたりするのは、まだ十何才かだった僕には、たいへんな重労働。それがいつも成績が抜群に一番だったがために、小中学校通じて、軍事教練のときには中隊長か小隊長。貧弱なからだで、いつもみんな

とはなれた先頭に立たされて、重たいサーベルの抜身をふりまわし、「捧げ一銃」「敬礼！」なんて、アホらしい号令をかけさせられた。何百人かのヘータイの前に立って、あるいは、全員でザッザッザッと行進しながら、聯隊長、あるいは天皇の御真影、それを納めた奉安殿の前を行進するとき、「捧げ一銃」。

何年間も小学校と中学校で級長、隊長をやらされた。小柄なからだに重たいサーベルを下げたりふりまわしたりする役目から逃げたい。そうとしたのが、とある日、中学三、四年ごろ。下校の道で、うしろから、いつもえらぶってる少尉さんか中尉さんの、配属将校の下っ端が自転車で来るのを知っていながら、敬礼はやめて、しらんかお。配属将校は、何回も自転車をとめてのぞきこんだ。それでも、しらんかお。それが通りすぎ、ふりかえりふりかえりしても、見ないふりしてそのまま帰宅した。もうそんなあほらしいことに、たまりかねてなのだろう。

翌日、教員室へ呼びだされて、何人もの先生からビンタ、往復ビンタ。それでも僕は「ごめんなさい」などと言わないで、ナグられるままで。

そのうち先生たちはなぐるのにあきた。たぶん、なんでなぐってるんか、わからんようになったんやと思う。べつに理由のない、なぐりやんか。

（「三木亘のこと」より）

\*本文中の引用のページ数は、米寿記念版『三木亘著作選：悪としての世界史—中東をめぐる』(三木亘著作選編集委員会、早稲田大学イスラーム地域研究機構発行、2013年)による。そのなかから抜粋がなされ、『悪としての世界史』(文春学藝ライブラリー、2016年)が、生前最後の著作物として刊行された。本稿の執筆にあたって、2016年12月に催された「三木亘先生を偲ぶ会」配布資料の「歴史生態学者三木亘先生語録」も適宜参照した。なお、三木の慶応大での教室風景などは、米寿記念本収録の拙文「姫路の吟遊詩人——ほんとうの知性」を参照されたい。

\*本文中の敬称は略した。シンポジウムで電源を失念した学生に感謝。それがなければ、本稿は現れなかった。



2014年4月20日、シンポジウム後の懇親会。ルヴェンソウヴェール駒場にて。  
三木（前列右から2人目）を囲んで。左隣は新井高子、右隣は順に片桐小幸、辻上奈美江。後列右端から高橋英海、家島彦一、永田雄三、上岡弘二、田村愛理、羽田正、杉田英明、山岸智子、飯塚正人の諸氏。近藤洋平撮影。

## (2) 三木亘先生著作目録

2014年4月作成  
2020年8月改訂

## 〈凡例〉

- 本「目録」は、中東イスラムの歴史・地域研究の分野で長く活動された三木亘氏(1925-2016年)の著作を、現在判明している範囲で編年体にもとめた一覧である。
- 書籍や季刊・月刊雑誌は原則として発行年月、新聞・週刊誌紙類は発行年月日まで記載した。
- [ ] 内は発表媒体自体の連載・コラム・シリーズ・範囲名や書籍の章題等を、〔 〕および \* は編注を示す。
- 誤記と思われる箇所には、和文ではルビ形式で「(ママ)」, 欧文では小字で「[sic)」を添えた。
- ◎印は『三木亘著作選 悪としての世界史』(2013年10月)、※印は文春学芸ライブラリー版『悪としての世界史』(2016年8月)の収録作品である。

## 1. 東京大学文学部史学科西洋史学専攻在学時代

(1946年4月-1949年9月)

## 1948年

- 「『大塚史學』の歴史」『思潮』第11号、特輯=モダニズム批判、昭森社、7月、6-15頁。
- 「『資料紹介』あたらしい郷土史の芽生え —— 『富山縣の人民解放運動史における先驅者と犠牲者』に寄せて」『歴史評論』第3巻6号(第17号)、9月、55-58、61頁。

## 1949年

- 「『書評』鈴木正四著「民主主義革命」(三木亘・井上清「民主革命に関する諸書の批評」の一部)、『歴史學研究』第138号、3月、45-46頁。
- (卒業論文)「フィレンツェ史におけるニッコロ・マキャヴェッリ」9月。

## 2. 全国銀行従業員組合書記時代

(1949年4月-1951年10月)

- 「『書評』「世界歴史」近世(上) 民主評論社刊」『全銀連』週刊82号、10月4日、第4面。

\* 署名「MN(筆名・森日二の頭文字)」。

- 「『書評』たかはし・しんいち著 日本歴史物語(上)」『全銀連』週刊83号、10月11日、第4面。

\* 署名「MN」。

- 「『KANEの歴史』」『全銀連』週刊89号、11月22日、第4面。

\* 「編集部がまとめた」として無署名だが、三木亘執筆であることは、1995年2月の「童女でおやぶん —— 碑文谷時代とその後」や、松谷みよ子「『連載』 じょうちゃん —— 私が歩んできた道」第16回「トウソウチュウ カエレヌ」(『週刊朝日』第111巻63号、2006年12月15日、78頁)からも裏付けられる。

## 1951年

- (企画・編集協力) 壺井繁治・大木惇夫選『銀行員の詩集(一九五一年版)』, 編集責任者=中田純一, 全国銀行従業員組合連合会文化部、8月。
- 「歴史家のあり方について —— ある座談会の報告」『歴史学月報』No.13、10月、4-5頁。
- 「研究会の経験から —— 労働者と歴史家」『歴史評論』第5巻6号(32号)、10月、71-79頁。

## 3. 東京都立深川高等学校教諭時代

(1951年11月-1965年3月)

## 1952年

- 「『臨時總會研究発表』平和の歴史の課題」『歴史學研究』第155号、1月、35-40頁。
- 「『平和懇談會記録』歴史學はどうあるべきか」太田秀通・竹内好・坂東宏・三木亘・高野〔姓のみ記載〕・石母田正・古島和雄・藤間生大・遠山茂樹・高橋磯一・倉橋文雄・松本新八郎・網野善彦、『歴史學研究』第155号、1月、47-55頁。
- 「世界史教育に於ける一つの試み」『研究』第2集、東京都立深川高等学校、3月、21-40頁。

## 1954年

- 「世界史のつくり方」『歴史學研究』第172号、6月、37-41頁。
- 「あとがき」, 市古宙三・上原専祿・江口朴郎・大野真弓・尾鍋輝彦・別枝達夫・山本達郎監修『世界史講座』IV(資本主義的ヨーロッパの制覇)、東洋経済新報社、10月、317-18頁。

## 1955年

- 「高等学校における実践」, 亀井勝一郎・阪本一郎・滑川道夫・波多野完治責任編集『読書指導講座』第10巻(教科学習と読書指導)、牧書店、3月、127-35頁。
- 「あとがき」, 上原専祿・江口朴郎・尾鍋輝彦・野原四郎・山本達郎・吉岡力監修『世界史講座』II(インド世界の形成/イス

ラム世界の形成), 東洋経済新報社, 4月, 293-94頁。

- ・「歴史理論」, 歴史學研究會編『歴史學の成果と課題』VI (一九五四年歴史學年報), 歴史學研究別冊, 岩波書店, 10月, 113-24頁。

## 1956年

- ・「第八回卒業生の修学旅行」『研究』第6集, 東京都立深川高等学校, 5月, 19-51頁。
- ・「ボルジア家の毒薬」, 編者代表=太田秀道『世界歴史物語』3 (西洋のあゆみ), 河出新書, 河出書房, 7月, 110-30頁。
- ・「西アジア諸国のアジア観——ナセルの考えを中心にして」, 上原専祿・仁井田陸・飯塚浩二監修『現代アジア史』第四巻(世界史におけるアジア), 大月書店, 8月, 215-23頁。
- ・〔分担執筆〕吉岡力編『学習資料世界史』, 分担協力=明石総一・荒井信一・板沢純男・大江一道・久坂三郎・五井直弘・清水勝太郎・三笠宮崇仁・三木亘, 旺文社, 9月。
  - \* 2000年7月「オアシスと永福町にて」に、「歴史教育研究所編の『世界史史料集』のイスラム関係の部分をかまされたとき、前嶋さんに相談すると、ソーヴァジェの編んだ仏訳史料集を貸していただいた」とある。その『世界史史料集』とは本書のことであろう。「第7章 イスラム世界, 6. フスタートの繁栄」(88-92頁)に「資料48 ムカッダシ「地上の諸地域」——ソーヴァジェの仏訳」が含まれている。
- ・「[[共同討議] 世界史像形成のために——諸国民の世界史意識と世界像] A (1955年1月, 出席者=上原専祿・尾鍋輝彦・江口朴郎・山本達郎・野原四郎・旗田巍・三木亘・荒井信一), B (1956年7月, 出席者=上原専祿・尾鍋輝彦・江口朴郎・山本達郎・野原四郎・前嶋信次・三木亘), 上原専祿・江口朴郎・尾鍋輝彦・山本達郎監修『世界史講座』VIII (世界史の理論と教育), 東洋経済新報社, 12月, 9-73頁。
- ・「年表のつくり方」『世界史講座』VIII (世界史の理論と教育), 東洋経済新報社, 12月, 111-22頁。
- ・「[[共同討議] 世界史をどうみるか——生徒と教師の世界史意識] A 生徒 (1954年12月, 出席者=荒井信一・大江一道・久坂三郎・斎藤周一・鈴木亮・三木亘・吉田悟郎), B 教師 (1954年12月, 出席者=上原専祿・尾鍋輝彦・大江一道・久坂三郎・田中陽児・三木亘・山本達郎・山上正太郎・吉田悟郎), 『世界史講座』VIII (世界史の理論と教育), 東洋経済新報社, 12月, 227-61頁。
- ・「あとがき」『世界史講座』VIII (世界史の理論と教育), 東洋経済新報社, 12月, 279-80頁。
- ・〔執筆協力〕江口朴郎『世界史概説』, 執筆協力者=荒井信一・五井直弘・田中陽児・松井透・三木亘, 秀英出版, 12月。

## 1957年

- ・〔編集協力〕江口朴郎『世界史』1956年4月30日文部省検定済高等学校社会科用教科書, 編集協力者=荒井信一・三木亘, 秀英出版, 3月。
  - \* のち, 江口朴郎『改訂版世界史』(1959年3月), 『三訂版世界史』(1962年3月)でも荒井信一とともに編集協力者。
  - \* 江口朴郎『世界史A』(1964年3月), 『新訂世界史A』(1974年3月)では荒井信一とともに別記著作者。
  - \* 江口朴郎・岡本敬二・酒井忠夫『世界史』(1973年3月), 『改訂世界史』(1976年3月)では, 荒井信一・加藤正春・川崎敏朗・木村邦雄・臺靖・山本洋幸とともに別記著作者。
- ・松田寿男・山本達郎・小堀巖・吉岡力・岸辺成雄・三笠宮崇仁・秀村欣二・伊勢仙太郎・藤田重行・清水勝太郎・大江一道, 司会=前嶋信次・三木亘「[[シンポジウム] 世界史教育における東西交渉史の諸問題」『季刊 歴史教育研究』第4号, 特集=東西交渉史の諸問題, 6月, 2-23頁。
- ・「ガンディーと回・印対立」『思想』第394号, 特集=ガンディー, 7月, 52-64頁。◎
- ・大江一道・吉田悟郎・菱刈隆永・荒井信一・岡部広治・三木亘・佐藤伸雄・明石総一・小島晋治・石川澄雄・久坂三郎・高橋硝一・高索辰正「[[座談会] 歴史教育と視聴覚教育」『季刊 歴史教育研究』第5号, 9月, 2-16頁。
- ・荒松雄・伊瀬仙太郎・坂本徳松・前嶋信次・三上次男・吉岡力・荒井信一・明石総一・井上和男・大江一道・坂東淑子・中岡三益・菱刈隆永, 司会=三木亘「[[座談会] 東西交渉史の諸問題——世界史におけるインド, 南アジア」『季刊 歴史教育研究』第6号, 12月, 3-13頁。

## 1958年

- ・島松栄一・小西四郎(司会)・下村富士男・吉田悟郎・三木亘・江口朴郎・荒井信一・明石総一・下山三郎・中村英勝・清水勝太郎・小沢栄一「[[座談会]「明治」時代の評価をめぐって」『季刊 歴史教育研究』第8号, 6月, 2-11頁。
- ・「[[書評] H. A. R. Gibb; Mohammedanism, A (sic) Historical Survey. Mentor Book, 1952」『季刊 歴史教育研究』第8号, 6月, 41-42頁。
- ・前嶋信次・加賀谷寛・嶋田襄平・中岡三益・板垣雄三, 司会=三木亘「[[座談会] 世界史におけるイスラム史の諸問題」『季刊 歴史教育研究』第10号, 12月, 2-16頁。

## 1959年

- ・「歴史叙述と歴史意識」『歴史評論』第106号, 6月, 1-5頁。
  - ◎ ※
- ・〔共訳〕K. M. パニッカル/坂本徳松・三木亘共訳『インドの歴史』東洋経済新報社, 6月。

- ・「朝鮮人と朝鮮史のこと」『歴史評論』第108号, 8月, 73-77頁。◎
- ・「探偵小説歴史学論序説」『歴史評論』第110号, 10月, 73頁。
- ・「[研究ノート] 現代アラブ史の視点」『歴史学研究』第235号, 10月, 38-42, 49頁。

#### 1960年

- ・坂本徳松・三木亘「[座談会] パニックル『インドの歴史』をめぐって」『季刊 歴史教育研究』第14号, 1月, 20-27頁。

#### 1961年

- ・「日本史教育研究会才二回全国大会 感想と提案」『季刊 歴史教育研究』第18号, 1月, 37-39頁。
- ・森日二「[評論] 国語を論ず」『ぶろめて』第2号, 東京都立深川高等学校, 6月, 41-46頁。  
\* 前記の通り「森日二」は筆名。「トルコの国語問題とわが国のそれをパレルに論じながら国語問題は技術的な問題ではなく「日本文化の主体性にかかわる問題であり、それ故にそれは思想的な問題である」と指摘した」(津村修也「ぶろめて考源学」『ぶろめて』第6号, 1963年11月, 82頁)。
- ・「トルコ革命とイスラーム —— ジャ・ゲカルプの思想」, 西順蔵・野原四郎・荒松雄・中岡三益・旗田巍・幼方直吉編『アラブのナショナリズム』講座近代アジア思想史第3, 弘文堂, 8月, 190-239頁。◎
- ・堀米庸三・三木亘・永原慶二・柴田三千雄「[座談会] 歴史研究と歴史叙述」『歴史学研究』第256号, 8月, 40-49頁, 32頁。
- ・「[項目執筆]「平和思想 西アジア」『アジア歴史事典』第8巻, 平凡社, 10月, 219-20, 221-22頁。
- ・「「世界資本主義」について —— 講座派, 大塚史学の思想」『歴史評論』第135号, 11月, 1-13頁。

#### 1962年

- ・「[書評] 丸山真男著「日本の思想」について」『ぶろめて』第3号, 2月, 56-60頁。
- ・「生活者の歴史学 —— 田中惣五郎さんのこと」『歴史評論』第138号, 2月, 7-14, 20頁。◎
- ・「アフリカ人の主体の形成」, 筑摩書房編集部編『世界の歴史』第15巻(帝国主義), 筑摩書房, 2月, 139-60頁。

#### 1963年

- ・「ヴィクトリアの「現代」 —— 現代史の深さ」『歴史評論』第150号, 2月, 40-50頁。◎
- ・「[創作] 木山透「踏あと」『ぶろめて』第5号, 3月, 36-41頁。  
\* のち, 1991年1月『三木先生ご夫妻を囲む会 —— 必読重要文獻』01-06頁に拡大コピーして再録。

\* 「この号を編集した私の自慢は三木に木山透のネームで「踏あと」という小説を書かせたことだ。これはあの雑然たる勤め先の机上でのみ書かれた。私は三木のテニスの相手をしながらしつこくねばってメ切りまでようやくあれだけ書かせた。その密度の高い詩のような文体に一驚した。私はこの合評会のとき三木がかつて堀辰雄を愛読し, 杉浦明平のところに入出入りした文学青年であったことを知った」(津村修也「ぶろめて考源学」83頁)。

- ・「[私の卒業論文(5)] メ切までにできたのは半分 —— 「マキャヴェッリ研究」『季刊 歴史教育研究』第29号, 10月, 42-44頁。

#### 1964年

- ・「[執筆協力] 江口朴郎『世界史A教授資料』, 執筆協力=荒井信一・太田美都里・土井正興・中岡元子・松井透・三木亘, 秀英出版, 6月。
- ・江口朴郎・三木亘・五井直弘・田中陽児, 司会=三木亘「[座談会] 世界史の現代的意味 —— 秀英出版「世界史A」を中心に」, 江口朴郎『世界史A教授資料』秀英出版, 6月, 261-302頁。
- ・「日本史的世界史への道」『歴史評論』第166号, 6月, 1-12頁。  
\* 2月15日, 歴史評論編集委員会主催研究会の話から。
- ・「具体的・能動的・民衆の歴史学 —— 「日本史的世界史への道」の補論として」『歴史評論』第167号, 7月, 33-41頁。◎
- ・「歴史家ジャバルティ」『イスラム世界』第2号, 7月, 17-37頁。◎
- ・「[書評的感想②] 勝田守一他著『日本の学校』 —— 現代史の第一級の書物／「教育理論のおくれ」に深い反省」『歴史教育研究』第33号, 10月, 46-48頁。

#### 1965年

- ・「「西アジア学」五つの方法的提案」『東洋文化』第38号(イスラム特集), 3月, 60-70頁。◎
- ・「[書評] W・M・ワット著『回教知識人 —— アル・ガザーリー研究』」『アジア経済』第6巻3号, 3月, 103-06頁。

#### 4. 東京都立大学附属高等学校教諭時代 (1965年4月-1972年4月)

- ・「[歴史への旅] 歴史学を棄てることについて」『歴史評論』第180号, 8月, 49-52頁。
- ・「maşlaḥaの歴史的展開」『オリエント』第8巻1号, 10月, 45-71, 103頁(英文要旨)。
- ・岡部広治・小池澄・斉藤孝・富永幸生・山極晃・大江一道・久

坂三郎・西郷和次・竹井光二・友定節・榎木修・三浦五郎・三木亘・水上敏雄・宮沢嘉夫・吉岡力・吉田悟郎・明石総一・工藤泰・菱刈隆永〔座談会〕再検討シリーズ第4回 第一次世界大戦(その1)『季刊 歴史教育研究』第37号, 10月, 7-31頁。

- 三木亘・石田進・毛里与三郎「中東・北アフリカ入門」, 江口朴郎・岡倉古志郎・蠟山芳郎監修／アジア・アフリカ研究所編集『アジア・アフリカ研究入門』青木書店, 12月, 238-61頁。

#### 1966年

- 岡部広治・小池澄・斉藤孝・富永幸生・山極晃・大江一道・久坂三郎・西郷和次・竹井光二・友定節・榎木修・三浦五郎・三木亘・水上敏雄・宮沢嘉夫・吉岡力・吉田悟郎・明石総一・工藤泰・菱刈隆永〔座談会〕再検討シリーズ第5回 第一次世界大戦(その2)『季刊 歴史教育研究』第38号, 1月, 2-25頁。
- 〔共著〕小倉芳彦・堀敏一・柳田節子・三木亘『教養人の東洋史』上, 現代教養文庫547, 1月。
- 〔共著〕田中正俊・小島晋治・新島淳良・三木亘・石田保昭『教養人の東洋史』下, 現代教養文庫548, 3月。
- 答える人=石田保昭・三木亘／聞く人=大江一道・滝尾紀子・古谷博・吉田悟郎・吉村徳蔵〔座談会〕イスラム世界の問題点を探る『歴史地理教育』第123号, 特集=アイルランドから沖縄まで, 8月, 19-26頁。

#### 1967年

- 「西アジア世界の形成と展開」〔近・現代の西アジア〕, 西嶋定生編『東洋史入門』有斐閣, 1月, 95-121, 196-208頁。  
◎ ※
- 〔書評〕M・H・カー著『イスラム的改革——ムハンマド・アブドゥッラシード・リダーの政治・法理論』『アジア経済』第8巻1号, 1月, 90-94頁。
- 荒井信一・遠山茂樹・永原慶二・中村政則・三木亘・山田昭次〔座談会〕「明治百年」と国民の歴史意識『歴史學研究』第320号, 1月, 1-13頁。  
\* 『国民文化』第87号(特集=「明治百年」をどう考えるか, 2月, 7-16頁)に再録。
- 「悪としての世界史」1-2, 『歴史地理教育』第130-131号, 3-4月, 3-9, 10-13頁。◎ ※

#### 1968年

- 〔分担執筆〕歴史教育研究所編『旺文社世界史事典』旺文社, 6月。
- 『地域研究と世界認識——第二次大戦後日本における地域研

究の思想』所内資料・調査研究部No. 43-14, イスラム研究会No. 3, アジア経済研究所, 7月, 1-43頁。

#### 1969年

- 〔書評〕アイユブ・カーン著／加賀谷寛・浜口恒夫共訳『パキスタンの再建』『アジア経済』第10巻1号, 1月, 90-94頁。
- 〔翻訳〕アハマド・アニス／池田修・三木亘共訳「アラブにおける社会主義への道」『中央公論』第84巻2号, 2月, 129-37頁。  
\* 『アル・ヒラル』1967年9月掲載論文。
- 「アニス教授について(解説)」『中央公論』第84巻2号, 2月, 130-31頁。
- 〔翻訳〕ムハンマド・アハマド・アニス／三木亘訳「西洋化しなかったエジプトの歩み——東西交渉」『東洋と西洋の交わり』目で見える大世界史8, 国際情報社, 2月, 51-53頁。
- 「イスラム教徒の見たナポレオン」, 嶋田襄平・岩永博・三橋富治男・三木亘『剣とコーラン』世界のドキュメント5, 新人物往来社, 8月, 207-45頁。
- 坂垣雄三・野原四郎・三木亘「西アジアと中国(座談)」, 菅沼正久・新島淳良・西順蔵・野原四郎共同編集『講座 現代中国』1(現代世界と中国), 大修館書店, 10月, 129-55頁。
- 坂垣雄三・犬丸義一・江口朴郎・尾鍋輝彦・斉藤孝・田中陽児・野原四郎, 司会=三木亘〔シンポジウム その1〕世界史の可能性 第1回, 『季刊 歴史教育研究』第50号(記念特大号), 10月, 2-26頁。
- 「西アジアにおける民族運動」『岩波講座世界歴史』第23巻(近代10 帝国主義時代Ⅱ), 12月, 137-68頁。◎

#### 1970年

- 坂垣雄三・犬丸義一・江口朴郎・尾鍋輝彦・斉藤孝・田中陽児・野原四郎, 司会=三木亘〔シンポジウム その1〕世界史の可能性 第2回, 『季刊 歴史教育研究』第51号, 2月, 7-25頁。

#### 1971年

- 「ウラマー論」〔「イスラム化」にかんする共同研究報告』4, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 3月, 108-19頁。
- 「地域研究と歴史学」『岩波講座世界歴史』第30巻(別巻:現代歴史学の課題), 岩波書店, 7月, 411-41頁。◎
- 「オスマン帝国のアラブ支配とその解体」『岩波講座世界歴史』第21巻(近代第8 近代世界の展開V), 岩波書店, 8月, 202-31頁。

## 1972年

- 「思想の言葉」『思想』第573号, 3月, 74-75頁。

5. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所時代  
(1972年5月-1986年3月)

- \* 1974年4-5月 ジャバルティール後150周年記念国際シンポジウムに参加。1か月エジプト滞在。シンポジウムについては, "Mu'tamar 'Ālamī 'an al-Jabartī fī al-Qāhira," (*al-'Ahrām*, April 26, 1974, pp. 4-5) などの紹介記事が見られる。
- \* 1974年10月-75年3月 文部省科学研究費による第1回海外調査(イスラム圏社会・文化変容の比較調査)。エジプト・トルコ・シリア・レバノン・イラクの香料薬種商を訪ね歩く。
- \* 1977年10月-78年3月 第2回海外調査。イラン・エジプト・モロッコを歩く。
- \* 1980年7月-81年3月 第3回海外調査。モロッコ・チュニジア・イエメンを歩く。
- \* 1983, 84, 86年 第4-6回海外調査(アラビア海・東地中海交流圏におけるイスラム基層文化の調査研究)。シリア・トルコ・イラン・パキスタンを歩く。

- 「[共同研究プロジェクト報告] イスラム化」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第16号, 8月, 35頁。
- 「[共同研究プロジェクト報告] エジプト農村社会と農民生活」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第16号, 8月, 38頁。
- 「[共同研究プロジェクト報告] イスラム化」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第17号, 12月, 31-32頁。

## 1973年

- 「[共同研究プロジェクト報告] イスラム化」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第18号, 3月, 24-25頁。
- (翻訳) ラウーフ・アッパース/三木亘訳「サラマ・ムーサーとエジプトにおける世俗主義思想」『思想』第586号, 4月, 120-36頁。
- 「[プロフィール] バーナード・ルイス教授」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第19号, 8月, 16頁。
- 「[プロフィール] ラウーフ・アッパース客員研究員」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第19号, 8月, 17頁。
- 三木亘・家島彦一「[共同研究プロジェクト報告] イスラム化」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第19号, 8月, 21-22頁。
- 「Bernard Lewis 教授の来日」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第19号, 8月, 22頁。
- 「[所内研究会発表要旨] いわゆる『近代化』について」『アジ

ア・アフリカ言語文化研究所通信』第19号, 8月, 24頁。

- 「[共同研究プロジェクト報告] イスラム化」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第20号, 12月, 17-18頁。

## 1974年

- (翻訳) アンワル = アブデル = マレク, (ききて) マフムード = ハッダード/三木亘訳・解説「文明論的戦略のために」『思想』第596号, 2月, 120-37頁。
- 荒井献・木田献一・下村由一・藤田重行・三木亘, 誌上参加 = 大岩川和正, 司会 = 板垣雄三「[シンポジウム] 世界史の中のユダヤ人 —— ユダヤ人とはなにか」『歴史教育研究』第55号, 2月, 2-29頁。
- 三木亘・永田雄三・家島彦一「[共同研究プロジェクト報告] イスラム化」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第21号, 3月, 19-21頁。
- (項目執筆)「ナセル」『ブリタニカ国際大百科事典』第14巻, TBSブリタニカ, 816-18頁。
- 「[共同研究プロジェクト報告] イスラム化」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第22号, 10月, 29頁。
- Raouf Abbas/三木亘「19世紀の日本, エジプトにおける郷紳 —— 豪農とA'yānの比較研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第9号, 11月, 25-40頁。

## 1975年

- 「[書評] W・C・スミス著/中村広治郎訳『現代におけるイスラム』」『アジア経済』第16巻2号, 2月, 86-88頁。
- 「人間移動のカルチャー —— 中東の旅から」『思想』第616号, 10月, 55-74頁。◎
- 「[共同研究プロジェクト報告] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第25号, 11月, 35頁。
- 「[所内研究会発表要旨] イスラム圏学術調査からかえて」中東諸国の薬種商」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第25号, 11月, 40-41頁。

## 1976年

- 「[書評] 吉岡昭彦『インドとイギリス』」『歴史学研究』第429号, 2月, 48-51頁。
- Wataru Miki, *Index of the Arab Herbalist's Materials* (Fihris bi-'Asmā' al-Nabātāt al-Tibbiya wa al-Mufradāt al-'Aṭṭārīya), *Studia Culturae Islamicae*, No. 2, Tokyo: Institute for the Study of languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 3月。
- 「[共同研究プロジェクト報告] アジア・アフリカにおけるイ

スラム化と近代化に関する調査研究』『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第26号, 3月, 28頁。

- 「[民族のこころ(33)] 食べかけのパン」『東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第27号, 7月, 4頁。

\* のち, 「[くにぶり・ひとぶり] 食べかけのパン」『異文化との出会い — アジア・アフリカのフィールドノートから』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1994年3月, 42-44頁。

- 「[プロフィール] アブデル・ラヒーム・アブデル・ラフマーン客員研究員」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第28号, 11月, 37頁。

- 「[共同研究プロジェクト報告] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第28号, 11月, 38頁。

- 「[翻訳] アブデルラヒーム = アブデルラフマーン/三木亘訳「エジプトの歴史教育 — その教科課程・目標・哲学と教授」『歴史学研究』第439号, 特集 = 諸外国における歴史研究と歴史意識 1, 12月, 39-44頁。

\* のち, アブデルラヒーム・アブデルラフマーン/三木亘訳「特別寄稿(1)エジプトの歴史教育 — 教科課程・目標・哲学と教授」, P. A. リドワーン, E. R. ハッラーズ他/池田修編訳『世界の教科書 = 歴史エジプト』ほるぷ出版, 1981年11月, 288-94頁。

- Raouf Abbas/Miki Wataru, "The Rural Gentry in the Nineteenth Century: Japan and Egypt — A Comparative Study of Gōnō and A'yān," *al-Majalla al-Tārikhiya al-Miṣriya* (Egyptian Historical Review), Vol. 23, 1976, pp. 17-57.

- "al-Jabartī as a Thinker: A Comparative Philosophy and Methodology of History," *'Abd al-Raḥmān al-Jabartī: Buḥūth wa Dirāsāt*, Treatises Presented to the International Conference on 'Abd al-Raḥmān al-Jabartī in 1974, Supervised by Dr. Aḥmad 'Izzat 'Abd al-Karīm, Cairo, 1976, pp. 8-17.

## 1977年

- 「[海外学術事情] アラブ史学界との交流から」『学術月報』第29巻11号, 2月, 27-30頁。

- [共著] 'Abd al-Raḥīm 'Abd al-Raḥmān and Wataru Miki, *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan: A Comparative Study* (al-Qarya fī Miṣr al-'Uthmāniya wa fī al-Yābān (sic) al-Tūkūghāwā: Dirāsa al-muqārana), *Studia Culturae Islamicae*, No. 7, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 3月。

- 「アラブの世界像」『世界史像の研究』1, 国際基督教大学アジア文化研究所, 世界史像研究会, 3月, 3-18頁。

- 「異星人と神話」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第

29号, 3月, 7-11頁。

- 「[海外談話室] ヤウミーヤート・ヒロシマ」『世界』第383号, 10月, 253頁。

- 「[共同研究プロジェクト報告] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第31号, 11月, 35頁。

## 1978年

- 「[医業], 松本重治監修/板垣雄三編『中東ハンドブック』講談社, 11月, 297-303頁。

\* のち, 永井道雄監修/板垣雄三編『新・中東ハンドブック』講談社, 1992年4月, 414-21頁。

- 「[所内研究会発表要旨] ことばの抑揚とくらしの抑揚」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第34号, 11月, 37-39頁。

- 「[共同研究プロジェクト報告] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第34号, 11月, 36頁。

## 1979年

- 相田重夫・上原淳道・三木亘「[公開鼎談] 歴史学の現実を語る」『学習院史学』第15号, 1月, 79-90頁。

\* 1978年10月14日開催, 史学会第二回例会。

- [共著] M. Salah Ahmed, Gisho Honda and Wataru Miki, *Herb Drugs and Herbalists in the Middle East* (al-'Aṭṭārāt wa al-'Aṭṭārūn fī al-Sharq al-'Awsaṭ / Dārū-ye Giyāh-o 'Aṭṭārī dar Khāvar-e Miyāne), *Studia Culturae Islamicae*, No. 8, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 3月。

- 「[表紙解説] カイロと薬種商」『月刊百科』第198号, 3月, 2頁。

- 「[共同研究プロジェクト報告] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第36号, 7月, 41頁。

- 「[共同研究プロジェクト報告] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第37号, 11月, 49頁。

- 「中東のくすりや(アツタール)を訪ねて — 第一章 ハッラーズ親子」『月刊シルクロード』第5巻10号, 12月, 18-25頁。

## 1980年

- 「[基督教文化研究所秋季公開講座1978年度] 民族と宗教 — 血と水のまつり」『基督教文化研究所 研究年報』第12号, 宮城女子学院大学, 5月, 41-58頁。

- 「中東のくすりやを訪ねて — 第二章 レバノン商人」『月刊シルクロード』第6巻1号, 1月, 53-60頁。
- 「中東のくすりやを訪ねて — 第二章 レバノン商人(二)」『月刊シルクロード』第6巻2号, 2月, 70-75頁。
- 「中東のくすりやを訪ねて — 第三章 問屋商人たち」『月刊シルクロード』第6巻3号, 4月, 26-31頁。  
\* 第6巻4号で「ハサン・サーレムと煙草屋のムハンマド」に標題を訂正。
- 「中東のくすりや(アツタール)を訪ねて — 第三章 ハサン・サーレムと煙草屋のムハンマド」『月刊シルクロード』第6巻4号, 5月, 3-10頁。
- 梅原猛・河合雅雄・作田啓一・谷泰・三木亘・山形孝夫「シンポジウム キリスト教神話の構造」『創造の世界』第34号, 5月, 72-93頁。  
\* のち、「キリスト教神話の構造《シンポジウム》」として, 山形孝夫「治癒神イエスの誕生」(ちくま学芸文庫, 2010年8月), 252-98頁に再録。
- 「[講演] イスラムと世界 — 4月22日開催の東京支部講演より抄録」『蔵前工業会誌』第755号, 6月, 3-12頁。
- 「[共同研究プロジェクト報告] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第39号, 7月, 28頁。
- 「中東のくすりやを訪ねて(6) — 第四章 その名も高きラゲブ・アルアツタール」『月刊シルクロード』第6巻7号, 8月, 70-74頁。
- 「中東のくすりやを訪ねて(7) — 第四章 その名も高きラゲブ・アルアツタール」『月刊シルクロード』第6巻8号, 10月, 10-15頁。
- 「[共同研究プロジェクト報告] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第40号, 11月, 43頁。
- (講演記録)「エジプトの伝統的市場(スーク)」『エジプト イスラーム都市 アル・フスタート』中近東文化センター研究会報告No. 1, 出光美術館三鷹分館, 12月, 39-61頁。  
\* 1980年5月24日の講演会記録。

#### 1981年

- イスラム圏調査隊・三木亘「[所内研究会発表要旨] イスラム圏社会・文化変容の比較調査(第3次)から帰って」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第43号, 11月, 46-47頁。

#### 1982年

- [共著] Jamal Bellakhadar, Gisho Honda and Wataru Miki, *Herb Drugs and Herbalists in the Maghrib (al-'A'shāb*

al-Ṭibbiya wa al-'Ashshābūn fī al-Maghrib), *Studia Culturae Islamicae*, No. 19, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 3月。

- 「宮本常一さんのこと」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第44号, 3月, 1-7, 49頁。◎
- 「[共同研究プロジェクト報告]「アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第45号, 7月, 34頁。
- 山田憲太郎・佐藤次高・三上次男・前嶋信次, 司会=三木亘「セッションⅡ:ムスリム商業の発展と物の交流」, 川床睦夫編『シンポジウム「東西交渉史におけるムスリム商業」』中近東文化センター研究会報告第3号, 出光美術館(三鷹分館), 7月, 75-148頁。  
\* 中近東文化センター/出光美術館三鷹分館, 1981年9月18-20日開催。
- 「[書評] 永田雄三・加賀谷寛・勝藤猛『中東現代史 トルコ・イラン・アフガニスタン』』『歴史と地理』第324号, 8月, 29-33頁。
- 「[地域・国別研究] 中東の伝統的な“くすりや”」『国際協力』第329号, 9月, 34-35頁。
- 「[民族学タテヨコ] 調味料と香辛料 “おふくろの味、のかかれた主役 西アジア(エジプト・イラン) — おおくの香料がはいったブレンドのベストセラー」『季刊民族学』第22号, 10月, 64頁。
- 「[共同研究プロジェクト報告] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第46号, 11月, 41頁。

#### 1983年

- 「[共同研究プロジェクト報告] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第47号, 3月, 36頁。
- 「[黙想 — 前嶋信次先生を悼んで] 前嶋信次先生を想う」『季刊東西交渉』第2巻2号(通巻6号), 7月, 27-29頁。
- 「中東のアツタール(薬種商)」『アッサラーム』第30号, 特集 I = イスラームの医薬, 9月, 24-33頁。◎
- 「[共同研究プロジェクト報告] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第49号, 11月, 45頁。

#### 1984年

- 臼杵陽・三木亘「デイル・F・アイケルマン著『中東 — 人類学的アプローチ』」『地域研究ブックレビュー』第1号, 5月,

18-30頁(コメントおよび討論のまとめ, 24-28頁。問答, 28-30頁)。

- 「[共同研究プロジェクト報告] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第50号, 3月, 37頁。
- 「[共同研究プロジェクト報告] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第51号, 7月, 45頁。
- 「[所内研究会発表要旨] バンコクで考えたこと —— UNITAR (国連訓練調査研修所) の研究企画セミナーに出て」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第51号, 7月, 47頁。

\* 標題のみで本文はなし。

- [共編著] 上岡弘二・中野暁雄・日野舜也・三木亘編『イスラム世界の人びと』全5冊, 東洋経済新報社, 10月。
- 「世界史のなかのイスラム世界」『イスラム世界の人びと』1 (総論), 東洋経済新報社, 10月, 1-91頁。◎ ※
- 板垣雄三・上岡弘二・佐藤次高・永田雄三・中野暁雄・日野舜也・松原正毅・三木亘・家島彦一・山形孝夫・渡辺金一「座談会 イスラム世界を考える」, 上岡弘二・中野暁雄・日野舜也・三木亘編『イスラム世界の人びと』1 (総論), 東洋経済新報社, 10月, 227-302頁。
- 「あとがき」, 上岡弘二・中野暁雄・日野舜也・三木亘編『イスラム世界の人びと』1 (総論), 東洋経済新報社, 10月, 383-84頁。
- 後藤晃・佐藤次高・富岡倍雄・永田雄三・中野暁雄・日野舜也・三木亘・村井吉敬「座談会 イスラム世界の農民」, 佐藤次高・富岡倍雄編『イスラム世界の人びと』2 (農民), 東洋経済新報社, 10月, 251-311頁。
- 梅村坦・小川了・高井清仁・谷泰・永田雄三・松原正毅・三木亘「座談会 イスラム世界の牧畜民」, 永田雄三・松原正毅編『イスラム世界の人びと』3 (牧畜民), 東洋経済新報社, 10月, 253-319頁。
- 清水廣一郎・永積昭・三木亘・家島彦一・湯川武・渡辺金一「座談会 イスラム世界の海上民」, 家島彦一・渡辺金一編『イスラム世界の人びと』4 (海上民), 東洋経済新報社, 10月, 241-306頁。
- 「カイロのくすり問屋たち」, 三木亘・山形孝夫編『イスラム世界の人びと』5 (都市民), 東洋経済新報社, 10月, 117-55頁。
- 鴨澤巖・後藤晃・坂本勉・田村愛理・中野暁雄・三木亘・山形孝夫「座談会 イスラム世界の都市民」, 三木亘・山形孝夫編『イスラム世界の人びと』5 (都市民), 東洋経済新報社, 10月, 379頁。
- 「あとがき」, 三木亘・山形孝夫編『イスラム世界の人びと』5 (都市民), 東洋経済新報社, 10月, 303-70頁。

- 「[随想] 旅びとの祭」『民話の手帖』第21号, 10月, 23-26頁。
- [翻訳] W・モンゴメリ・ワット『地中海世界のイスラム —— ヨーロッパとの出会い』筑摩叢書292, 筑摩書房, 11月。  
\* のち, ちくま学芸文庫(筑摩書房, 2008年5月)として再刊。
- 「[共同研究プロジェクト報告] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第52号, 11月, 38-39頁。
- [項目執筆] 「アフサーイー」「アリー・ベイ」「エジプト【近代】」「カイロ」『平凡社大百科事典』11月, 第1巻, 387, 572頁; 第2巻, 521-22, 1449-51頁。  
\* のち, 『世界大百科事典』全34巻(1988年3月)の第1巻, 373, 581頁; 第3巻, 527頁; 第4巻, 675-77頁に再録。

### 1985年

- [講演記録] 「イスラム世界からみたアメリカ(3月22日)」『経済倶楽部講演』第435号, 5月, 43-74頁。◎  
\* 司会=原田運治。
- 「「等身大」ということ」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第54号, 7月, 1-6頁。◎
- 「[研究所活動・共同研究プロジェクト] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第54号, 7月, 32-33頁。
- 「[研究所活動・共同研究プロジェクト] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第55号, 11月, 47頁。

### 1986年

- [共著] K. H. C. Başer, Gisho Honda and Wataru Miki, *Herb Drugs and Herbalists in Turkey*, Studia Culturae Islamicae, No. 27, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 3月。
- [共著] Khan Usmanhani, Gisho Honda and Wataru Miki, *Herb Drugs and Herbalists in Pakistan*, Studia Culturae Islamicae, No. 28, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 3月。
- 「[研究所活動・共同研究プロジェクト] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第56号, 3月, 44頁。

## 6. 慶應義塾大学文学部史学科時代

(1986年4月-1991年3月)

- [[研究所活動・共同研究プロジェクト] アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究]『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第57号, 8月, 36-37頁。

## 1987年

- [講演記録]「イスラム世界の歴史生態学」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第59号, 3月, 1-9頁。◎
- [紹介] エドワード・W・サイード/板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳『オリエンタリズム』『オリエント』第29巻2号, 3月, 160-62頁。

## 1988年

- [[変動する中東 Part 3 社会・文化編] 中東の伝統医学] 1-3, 『中東協力センターニュース』第12巻11号-13巻1号, 2-4月, 36-37, 41-45, 33-36頁。
- 荒井信一・三木亘・大江一道・池田孝江・野田美都里・大橋登代子[[歴史よもやま話] 金沢誠先生を囲んで]『歴史教育研究』第73号, 3月, 2-17頁。  
\* 1987年6月19日, 金沢邸にて。
- 「文明論を考える」, 近森正構成・編集『三田史学の現代<sup>いま</sup>——1988年度三田史学会大会総合部会シンポジウム』三田史学会, 10月, 23-36, 48, 52-53頁。  
\* 1988年10月22日開催。
- 「文明移転の諸問題」『文明』第54号, 11月, 5-21頁。  
\* 5月9日, 第62回文明理論研究会での発表に加筆・修正。

## 1989年

- 「にぎやかなインド洋」『香料のある暮らし——インド洋の恵み』『週刊朝日百科 世界の歴史』39 (9~10世紀の世界/生活 海の交易路), 朝日新聞社, 8月20日, D-226, 248-51頁。
- 「地中海世界と文明移転の諸問題」, 坂口昂吉編著『地中海世界と宗教』慶應通信, 10月, 9-25頁。◎ ※
- 「アラブの疾病観」『歴史における自然』シリーズ・世界史への問い1, 岩波書店, 10月, 255-83頁。◎

## 1990年

- [共著] Gisho Honda, Wataru Miki and Mitsuko Saito, *Herb Drugs and Herbalists in Syria and North Yemen (al-'A'shāb al-Ṭibbiya wa al-'Aṭṭārūn fi Sūriyā wa al-Yaman al-Shamāliya)*, Studia Culturae Islamicae, No. 39, Tokyo:

Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 3月。

- 「[激震・弱震]「力の均衡」という幻想」『三色旗』第506号, 5月, 37頁。
- 「イスラムから見た中東危機」『情況』第1巻5号, 特集=イラク攻略!? イスラム世界の求めるもの, 11月, 20-30頁。
- 村山光一・三木亘・網野善彦, 司会=湯川武「1989年度三田史学会 総合部会シンポジウム「社会史の国際比較」」『史学』第59巻4号, 12月, 85-126頁(発言は100-05, 117-21頁)。

## 1991年

- 『三木先生ご夫妻を囲む会——必読重要文献』東洋史談話会, 1月。  
\* 「経歴」「業績一覧」(解題つき)「三木先生語録——ご講義の抜粋から」『教養人の東洋史』初版「まえがき」「小説「踏あと」」を収む。「囲む会」は, 1月19日に慶應義塾大学三田校舎519番教室で行なわれた最終講義「歴史生態学的世界史」のあと, 港区三田のシャトー(華都) 飯店にて開催。
- 「[時の話題 アラブを考える] アラブのつきあいの文化」『三田評論』第922号, 2月, 54-55頁。
- 浅井信雄・池田修・臼杵陽・栗田禎子・後藤明・酒井啓子・田村愛理・林武・松原正毅・三木亘・牟田口義郎・湯川武, 司会=板垣雄三「座談会・湾岸危機——戦争と日本」, 板垣雄三編『中東湾岸戦争と日本——中東研究者の提言』第三書館, 2月, 9-87頁(三木亘「コメント・湾岸戦争勃発のあとで」95-97頁)。

## 7. 慶應義塾大学退職後

(1991年4月-1992年3月)

- 「[彙報] 三木亘先生最終講義」『史学』第60巻1号, 4月, 171頁。
- 「三田史学の伝統を考える」『史学』第60巻2/3号, 特集=三田史学の百年を語る, 6月, 5-8頁。
- 「三田史学の百年を語る 第一回座談会」『史学』第60巻2/3号, 特集=三田史学の百年を語る, 6月, 9-10頁。  
\* 1990年6月16日開催。会長挨拶。
- 「第二回座談会」『史学』第60巻2/3号, 特集=三田史学の百年を語る, 6月, 65-67頁。  
\* 1990年6月23日開催。
- 「[報告] イスラム研究の系譜と慶應義塾(二)」『史学』第60巻2/3号, 6月, 107-30頁。

- 「[文化を語る] 野蛮としての偶像崇拜」『経済同友』第514号, 6月, 12-13頁。◎
- 「[第五セッション 聖域・権力・経済構造] 滅びのシステムとしての都市」, 文部省科学研究費重点領域研究「イスラムの都市性」事務局編『「イスラムの都市性」全体集会報告書』第三書館, 9月, 244-52頁, 305頁(レジュメ)。

#### 1992年

- 「つきあいがかんじん —— いいかげん外国語修得法」, 阿部謹也編『私の外国語修得法』悠思社, 3月, 139-62頁。◎
- \* のち, 中公文庫(中央公論新社, 1999年4月, 161-86頁)に再録。

### 8. 静岡精華短期大学時代

(1992年4月-1995年3月)

- 岩見隆・湯川武・羽田功, 司会=三木亘「1991年度三田史学会大会シンポジウム『ことばの歴史生態学』」『史学』第62巻3号, 1月, 75-124頁(発言は75, 82-83, 92, 101-07, 110-12, 114-15, 117-18, 120-24頁)。
- 「[V 都市の生活と文化 F] 都市の社会生活」4. アッタール(くすりや)」「[VI 引き裂かれる都市 A] 都市と革命」4. ナポレオン占領下のエジプト都市」, 板垣雄三・後藤明編『事典 イスラムの都市性』垂紀書房, 5月, 418-20, 505-06頁。
- 「中東における民族の問題」『歴史学研究』第633号, 特集=地域世界と国民国家 —— アラブの場合(1), 6月, 2-12頁。\*

#### 1993年

- 「[研究会] イスラム世界を理解するために」『歴史教育研究』第76号, 3月, 1-15頁。◎
- \* 1991年7月17日, 法政二高にて開催。
- 「人びとの出会い, それが都市であった —— 都市発祥の地・オリエントの歴史は語る」『情況』第二期第4巻3号, 特集=都市 —— 空間の政治学, 4月, 63-76頁。◎ \*
- 「解説」, ラルフ・S・ハトックス著/斎藤富美子・田村愛理訳『コーヒーとコーヒーハウス —— 中世中東における社交飲料の起源』同文館, 7月, 241-53頁。
- 「ジョニイへの伝言と私」『季刊アラブ』第66号, 9月, 5頁。

#### 1994年

- 「香料文化とアミノ酸文化」『季刊アラブ』第70号, 9月, 12-14頁。
- 「[書評] 加藤博『私的土地所有権とエジプト社会』」『社会経済

史学』第60巻4号, 11月, 106-08頁。

- 板垣雄三・三木亘・飯塚正人・上岡弘二・黒木英充・永田雄三・中野暁雄・林徹・日野舜也・家島彦一「[30周年記念特集 長期プロジェクト回想] 座談会「イスラム化」プロジェクトの回顧と展望」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第82号, 11月, 1-15頁。
- 「[シリーズ: わたしの5冊(28)] アラブ本草事始」『中東研究』第397号, 12月, 17-22頁。◎

#### 1995年

- 「童女でおやぶん —— 碑文谷時代とその後」『松谷みよ子の本』第4巻, 月報, 講談社, 2月。◎
- \* 頁番号なし(冒頭から6-8頁目に収録)。

### 9. 静岡精華短期大学退職後

(1995年4月- )

- 「イスラム圏の香料薬種商 —— アラブ本草事始」, 山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界』下, 思文閣出版, 7月, 197-221頁。◎
- 「イスラム世界における貴種」, 村井康彦編『公家と武家』思文閣出版, 10月, 279-305頁。◎
- 「アラブ医学・香料薬種商の養生」『is』第70号, 特集=養生術, 12月, 20-25頁。
- 「『ちょっと自叙伝』風小論 —— 三木先生古希の会記念」私製, 11月4日。
- \* 「つきあいがかんじん —— いいかげん外国語修得法」「教養人の東洋史」まえがき」と自筆年譜を収む。「古希の会」は慶應義塾大学三田キャンパスで開催。

#### 1996年

- 「[研究会要旨] 中東と地中海 —— イスラムの視点から(1995年12月16日/上智大学にて)」『地中海学会月報』第187号, 2月, 3頁。
- 「[読書室]『講座イスラム世界』(全5巻)」『歴史地理教育』第544号, 2月, 94-95頁。
- 「[解説] 固有名の世界の人間模様」, 前嶋信次『アラビアの医術』平凡社ライブラリー, 5月, 240-47頁。

#### 1997年

- 「ふたつの「預言者の医術」」, 山田慶兒・栗山茂久編『歴史の中の病と医術』思文閣出版, 3月, 591-615頁。

- ・「上原専祿」, 今谷明・大濱徹也・尾形勇・樺山紘一編『20世紀の歴史家たち(1)』日本編・上, 刀水書房, 7月, 171-85頁。◎
- ・〔項目執筆〕「上原専祿」『歴史学事典』第5巻(歴史家とその作品), 責任編集=岸本美緒, 弘文堂, 10月, 85-86頁。

#### 1998年

- ・稲賀繁美・三木亘・村田雄二郎, 司会=板垣雄三「〔公開シンポジウム〕西欧人の自画像とイスラーム世界」, 「〔座談会〕西欧人の自画像とイスラーム世界」『イスラーム世界』第50号, 2月, 64-100頁(三木亘「報告2 中東とヨーロッパの歴史的關係と生態」74-79頁)。
- ・「暮らしのなかの文化 香りの世界 — 香料」〔コラム〕酒「〔コラム〕嗜好性飲料」, 大塚和夫編『アジア読本 アラブ』河出書房新社, 4月, 63-69, 70-71, 80-81頁。
- ・〔単著〕『世界史の第二ラウンドは可能か — イスラーム世界の視点から』これからの世界史2, 平凡社, 9月。
- ・「人類滅亡観光協会のこと」『月刊百科』第432号, 10月, 14-15頁。

#### 2000年

- ・「オアシスと永福町にて」, 前嶋信次『イスラームとヨーロッパ』前嶋信次著作選2, 平凡社東洋文庫, 7月, 452-57頁。◎

#### 2001年

- ・〔項目執筆〕「医者<sup>4</sup>(イスラームの)」『歴史学事典』第8巻(人と仕事), 責任編集=佐藤次高, 弘文堂, 2月, 23-24頁。
- ・「〔書評と本の紹介〕佐藤次高『聖者イブラーヒーム伝説』」角川書店, 2001年『地域研究スペクトラム』第7号, 7月, 39-42頁。
- ・「アラブ医学の発生から今日まで」『Aromatopia』第10巻5号, 特集=イスラーム文化の香りとハーブ: 中近東を中心に, 9月, 6-14頁。
- ・「〔特別インタビュー〕イスラームにおける国家とは何か」『環歴史・環境・文明』第6号, 7月, 16-29頁。
- ・「文明が減びるとき」『情況』第三期第2巻10号, 特集=揺れる世界の中のテロと戦争, 12月, 24-28頁。

#### 2002年

- ・三木亘・板垣雄三・西谷修「〔鼎談〕「世界史」の中のイスラーム」『別冊 環』④(イスラームとは何か — 「世界史」の視点から), 5月, 1-43頁(三木亘「問題提起 生態学からみた世界史の中のイスラーム」4-11頁)。  
\*『機』No.126, 5月, 4-6頁に一部再録。
- ・「〔書評〕ジャネット・L・アブー = ルゴド/佐藤次高・斯波

- 義信・高山博・三浦徹訳『ヨーロッパ覇権以前 — もうひとつの世界システム』『歴史と地理』第556号(世界史の研究192), 8月, 49-53頁。
- ・遠藤郁子・陣内秀信・三木亘・武者小路公秀「〔座談会〕内なるヨーロッパを超えて」『別冊 環』⑤(ヨーロッパとは何か), 12月, 160-209頁(三木亘「問題提起 世界史像の転換は可能か」171-79頁)。

#### 2004年

- ・〔項目執筆〕「医学<sup>3</sup>(イスラームの)」『歴史学事典』第11巻(宗教と学問), 責任編集=岸本美緒, 弘文堂, 2月, 17-18頁。
- ・「三つの島国論 — アメリカとイギリスのブリテン島, そして日本の孤島」『情況』第三期5巻3号, 特集=イラク侵略戦争と抵抗運動の根源を問う, 3月, 62-81頁。
- ・幕内秀夫・鶴田静・三木亘「〔鼎談〕「食」とは何か」『環 歴史・環境・文明』第16号, 特集=「食」とは何か, 2004年1月, 32-72頁(三木亘「問題提起 文明から捉えた「食」」40-44頁)。  
\*『機』No. 144, 1月, 10-14頁に一部転載。
- ・「〔帝国以後〕への私注」『環 歴史・環境・文明』第18号, 特集=「帝国以後」と日本の選択, 2004年7月, 154-58頁。

#### 2005年

- ・「〔カタリ連載 ①〕ことばと音楽 — 中東の旅から」『ミテ — 詩と批評』第69号, 1月24日, 1-6頁(新井高子「返信です」6-10頁)。  
\*本誌は各掲載作品ごとに1頁起こし。
- ・「〔カタリ連載 ②〕方言さまざま」『ミテ — 詩と批評』第78号, 10月24日, 1-4頁。
- ・「〔講演記録〕「世界史の中でイラク戦争を考える(阿佐ヶ谷市民講座)」『国家機密法に反対する懇談会だより』No. 52, 3月17日, 1-21頁。
- ・「〔コメント2〕天子制とカリフ制 — 構造比較」, 笠谷和比古編『国際シンポジウム 公家と武家の比較文明史』思文閣出版, 8月, 183-90頁。  
\*アブドゥルカリーム・ラーフェク「王, カリフもしくはスルタン — 1920年, シリアはなぜ王制を選んだのか」(163-77頁)へのコメント。
- ・「〔カタリ連載 ③〕悲しき優等生」『ミテ — 詩と批評』第79号, 11月28日, 1-4頁(新井高子「返信です」4-9頁)。

#### 2006年

- ・「〔カタリ連載 ④〕つきあいということ」『ミテ — 詩と批評』第87号, 7月31日, 1-7頁(新井高子「返信です」7-10頁)。

- 『[IV 中東・西欧] 天皇制とカリフ制 —— 王権のコスモロジーの構造比較』, 笠谷和比古編『公家と武家Ⅲ 王権と儀礼の比較文明的考察』思文閣出版, 11月, 381-94頁。

\* 2005年8月「天子制とカリフ制 —— 構造比較」の増補・訂正版。

- 『[カタリ連載5] フランス語をめぐる』『ミテ —— 詩と批評』第92号, 12月25日, 1-5頁。

## 2007年

- 『[カタリ連載6 (5の続き)] 漢語をめぐる』『ミテ —— 詩と批評』第93号, 1月27日, 1-4頁 (新井高子「返信」4-8頁)。
- いいだもも・片桐薫・針生一郎・近藤節也・三木亘・なだいなだ・金子務, 主宰=猪野修治『連続懇談特集: いいだもも著・藤原書店刊『主体の世界遍歴』をめぐる』第47回「地中海世界のミノア・ミュケーナイ文明とは何であったのか? —— 線文字B文書の発見によるクレタ島文化とギリシャ文化の連続化 (それによる人類文明の地中海世界史的連続性)」, パネラー=三木亘, 『湘南科学史懇話会通信』第14号, 8月, 82-129頁 (三木亘「世界史におけるギリシア幻想」85-96頁, いいだもも「リブライ講演」96-114頁, 「全体討論」114-29頁)。

\* 2006年7月2日開催。http://shonan-kk.net/47th.pdf

## 2008年

- 澁澤幸子・永田雄三・三木亘, 司会=岡田明憲『[座談会] トルコとは何か』『別冊 環』⑭ (トルコとは何か), 5月, 1-47頁 (三木亘「問題提起 文明史からみたトルコ」17-20頁)。

\* 『機』No. 195, 2008年5月, 6-8頁に一部再録。

- 『[リレー連載 いま「アジア」を観る 67] 固有名のアジア』『機』No. 197, 7月, 21頁。

\* のち, 藤原書店編集部編『「アジア」を考える 2000~2015』(藤原書店, 2015年6月, 90-91頁)に再録。

## 2013年

- 『三木亘著作選 悪としての世界史 —— 中東をめぐる』同編集委員会 (代表=湯川武) 編, 早稲田大学イスラーム地域研究機構発行, 10月。

## 2014年

- 『歴史生態学から見た世界史の構図』『環 歴史・環境・文明』第59号, 2014年10月, 66-75頁。
- 『[カタリ連載7] 世界史から見たことばのゆくえ』『ミテ —— 詩と批評』第128号, 9月24日, 1-6頁 ([カタリ連載 (ことばと音楽) 8] 新井高子「返信です」第129号, 12月31日, 1-5頁)。

## 2016年

- 『悪としての世界史』文春学藝ライブラリー 歴史26, 文藝春秋, 8月。

### \* 書誌情報不明の論考

- 『西アジア史の特殊性について』『教授資料シリーズ 世界史』No. 25, 秀英出版, 1957年6月 (?), 19-22頁。

- 『[国際関係] 中近東 イスラムから』1991年, 166-68頁。

- 「くろはさんのためのレクイエム」(黒羽清隆氏追悼文) 手稿, 1987年以降。◎

### 「三木亘先生著作目録」の作成について

本センターでは2014年4月20日に「悪としての世界史 三木亘の中東地域文化論」と題するシンポジウムを開催（報告は『ニュースレター』Vol. 6, 2015年3月）し、そのさい参加者に配布する資料の一環として「三木亘先生著作一覧」を作成した。本「目録」はその「一覧」の増補改訂版である。

「一覧」作成に当たっては、『三木亘著作選』のために同書編集委員会で蒐集したり、三木氏本人から提供されたりした著作の複写をもとに、『日本における中東・イスラーム研究文献目録 1868年-1988年』（財団法人東洋文庫附置・ユネスコ東アジア文化研究センター、1992年3月）や国立国会図書館蔵書目録（NDL-OPAC）等で情報を補ったが、もとより短時日にまとめられたため暫定版にとどまった。今回は、より多くの文献検索機能を活用して広く関連文献に当たる一方、三木氏が自身の著述や講演のなかで言及している論考や辞典・事典項目類はできる限り探索し、卒業論文を除いてすべて現物を確認し、情報の増補に努めた結果、収録項目数は3割ほど増加した。とは言え、例えば事典・辞典類の執筆項目などは偶然に発見した 경우가多く、網羅的な蒐集には程遠い状況である。それでも、現段階での調査結果のとりまとめには一定の意味があると考え、本『ニュースレター』に掲載していただくこととした。

作成にさいしては、以下の諸機関や関連諸氏のご協力を得たことに感謝申し上げたい。

（杉田英明記）

国立国会図書館、同ブラング文庫（『全銀連』）、東京都立深川高等学校図書館（『ぶろめて』『研究』）、東書文庫（『世界史』教科書類）、教科書研究センター・教科書図書館（『世界史』教科書・教授資料類）、東京大学総合図書館、東京大学駒場図書館、東京大学文学部図書室、東京大学東洋文化研究所図書室、明治大学図書館（*al-Ahrām* 紙、近藤洋平氏調査）

新井高子氏（埼玉大学、『ミテ』編集・発行人、資料提供）、金子美和氏（東京大学文学部イスラム学研究室、資料提供）、刈屋琢氏（藤原書店編集部、資料蒐集・整理）、竹内涼子氏（平凡社編集部、『世界大百科事典』執筆項目検索）、福田典子氏（慶應義塾大学文学部卒業生、資料提供）、山崎優子氏（藤原書店編集部、資料蒐集・整理）



2013年11月17日、三木亘邸にてシンポジウムの相談。  
右から三木先生、家島彦一先生、筆者。  
上岡弘二撮影。

●UTCMESスタッフ紹介（2020年9月30日現在）

〈スタッフ〉

高橋 英海（センター長、兼務教授）  
森元 誠二（客員教授）  
近藤 洋平（特任助教）  
瀬口 美加（事務補佐員）

杉田 英明（兼務教授）  
鈴木 啓之（特任准教授）  
倉澤 理（バフワーン文庫・特任研究員）

〈UTCMES運営委員〉

高橋 英海（委員長、大学院総合文化研究科教授）  
橋川 健竜（総合文化研究科教授・グローバル地域研究機構長）  
黛 秋津（総合文化研究科准教授）  
杉田 英明（総合文化研究科教授）

齊藤 文子（総合文化研究科教授・副研究科長）  
真船 文隆（総合文化研究科教授）  
菊地 達也（人文社会系研究科准教授）

〈スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座運営委員〉

高橋 英海（委員長）                      齊藤 文子                      橋川 健竜  
真船 文隆                                  黛 秋津                      杉田 英明

●発行者情報 UTCMESニュースレター VOL.17 2020年9月30日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター（スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座）  
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 TEL：03-5465-7724 FAX：03-5454-6441  
<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/>

印刷：佐川印刷株式会社

〒140-0004 東京都品川区南品川5-2-10 TEL：03-5715-0912 FAX：03-5715-0931